

岩村田遺跡群

西一本柳遺跡 XIII

長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡 第13次調査

2006.3

油井 基

佐久市教育委員会

例　　言

1. 本書は油井 基が行う貨物事務所建設に伴う岩村田遺跡群西一本柳遺跡 XIII の発掘調査報告書である。
2. 調査委託者 油井 基
3. 調査受託者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び所在地 西一本柳遺跡 XIII (INP XIII) 佐久市岩村田下植田 1787-1
5. 調査期間及び面積 発掘調査 平成17年4月 5日～平成17年4月27日
整理調査 平成17年4月28日～平成18年3月24日
開発面積 1,578 m² 調査面積 337 m²
6. 本遺跡の調査及び報告書作成は小林が担当した。
7. 本書及び当遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1. 遺構の略記号は住居址—H、掘立柱建物址—F、土坑—D、溝址—M、P i t—Pである。
2. 掘図の縮尺は遺構—1/80、遺物1/4である。これ以外のものは、掘図中のスケールを参照されたい。
3. 遺構の海拔標高は各遺構毎に統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記してある。
4. 土層の色調は1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
5. 遺物掘回番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。
6. 調査区グリッドは公共座標の区割りにしたがい、間隔は4×4 mに設定した。
7. 掘図中における網掛、波線は以下のことを表す。



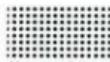
堀方埋土



地山



柱痕



燒土・黒色処理



赤彩



堀方検出遺構

目　　次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯	-----	1
-----------	-------	---

第2節 調査体制	-----	1
----------	-------	---

第3節 調査日誌	-----	1
----------	-------	---

第4節 遺跡の立地と周辺遺跡	-----	2
----------------	-------	---

第5節 基本層序	-----	3
----------	-------	---

第6節 検出遺構・遺物の概要	-----	3
----------------	-------	---

第Ⅱ章 遺構・遺物	-----	
-----------	-------	--

第1節 竪穴住居址	-----	3
-----------	-------	---

第2節 掘立柱建物址	-----	30
------------	-------	----

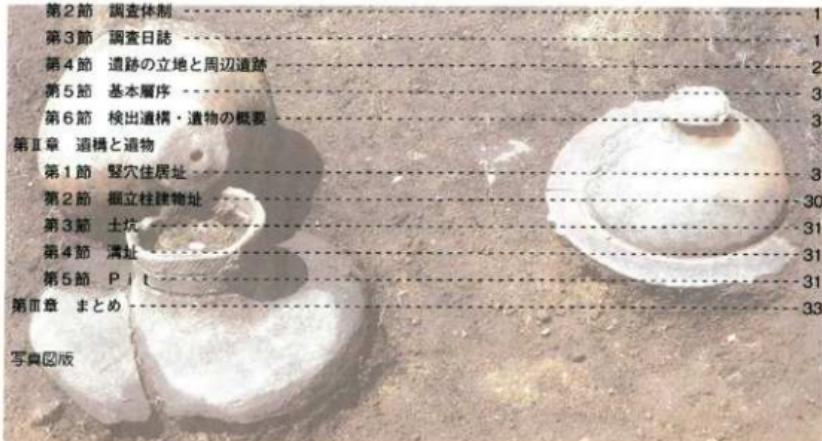
第3節 土坑	-----	31
--------	-------	----

第4節 溝址	-----	31
--------	-------	----

第5節 P i t	-----	31
-----------	-------	----

第Ⅲ章 まとめ	-----	33
---------	-------	----

写真図版



第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

岩村田遺跡群は、佐久市岩村田地籍の湯川右岸台地上に展開する佐久市有数の大遺跡群であり、弥生時代中期～中世の複合遺跡である。

西一本柳遺跡は、遺跡群の南西端に位置する。本調査は今回も含め過去13回行われており、人面付土器の頭部(1)、剣型石製品(2)などの弥生時代の貴重遺物が発見されている。

今回、遺跡内において油井 基により貸事務所の建設が計画されたため、佐久市教育委員会では、文化財保護法第57条の届出を受け試掘調査を行った。その結果遺構が発見されたため、保護協議を行い、遺跡破壊の恐れがある部分については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。

第2節 調査体制

調査主体者 佐久市教育委員会 教育長 高柳 勉 (5月17日就任) 三石 昌彦 (5月18日就任)

事務局教務次長 郷沢 健一

文化財課長 中山 晴

文化財調査係長 高柳 正人

文化財調査係 林 幸彦 須藤 隆司 小林 真寿 羽毛田卓也 富沢 一明

上原 学 赤羽根太郎(4月～9月) 神津 格 (10月～) 出澤 力

調査体制 調査担当者 小林 真寿 富沢 一明 出澤 力 森泉かよ子

調査員 岩崎 重子 上原 幸子 白田 真杉 小林喜久子 小林 幸子

小林 紗子 小山 功 塚 益子 佐藤志げ子 清水 美恵

麻島 光子 高橋 好春 朝田 貴恵 花岡美津子 林 美智子

細谷 秀子 堀籠 淳子 宮川百合子 百瀬 秋男 森角 雅子

郷沢 孝子 郷沢千賀子 山村 容子

第3節 調査日誌

4月5日 器材搬入、重機による表土除去。

4月6日 遺構確認・掘り下げ・記録。

4月7日 現場終了。

4月8日 室内整理調査開始。

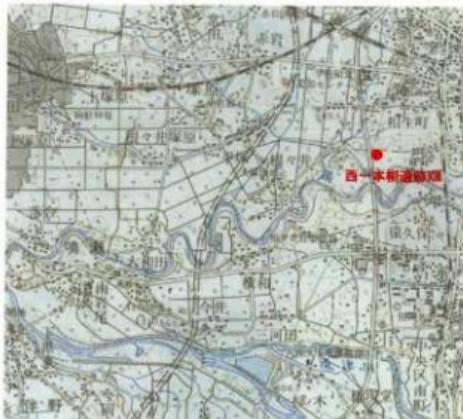
図面・写真等記録の整理及び修正。

遺物洗浄・注記・接合・復元・実測・

写真撮影。

原稿の執筆、報告書の作成。

3月31日 報告書刊行をもって調査終了。



第1図 西一本柳遺跡位置図 (1:10,000)

第4節 遺跡の立地と周辺遺跡

西一本楠道路が、岩村田遺跡群の南西端に位置することは、第1節で述べたとおりである。湯川が形成した第2河岸段丘上に展開しており、標高は690 m前後である。常本用水がこの段丘下に沿って引かれており、その掘削に際し、地形を改変しているため、本段の段丘形状は不明であるが、比較的なだらかな印象である。

遺跡内において過去13回に及ぶ本調査が実施されたのと同様に、周辺遺跡においても数多くの調査が実施されている。同じ遺跡群内の東一本柳古墳は昭和46年に調査が行われ、彫金が施された金銅製の馬具飾金具が多数出土した。隣接する北西の久保遺跡からは弥生時代の木棺墓や方形周溝墓、古墳時代後期の円墳や人物・器材・動物等の埴輪、中世の五輪塔群などが発見されており、いくつかの時代において墓域として利用されたことが判明した。北西の久保遺跡の西方に展開する鳴澤遺跡群五里田遺跡からは、弥生時代の鉄劍・鉄劍・銅鏡などが概期の集落や円形周溝墓などとともに発見されており、弥生時代における西一本柳遺跡・北西の久保遺跡との関係が注目される。南方の湯川第1河岸段丘上に展開する中西の久保遺跡群からは、複数面の水田址や古墳時代の集落址が発見されており、弥生時代においては西一本柳遺跡の北方の低地と共に生産域であったことが明らかとなった。湯川対岸の左岸の第1河岸段丘上には、仲田遺跡が展開しており、花弁双螺旋八花鏡や「？」寺墨書きの須恵器坏の存在から、古代の寺が存在した可能性が指摘される。また、弥生時代前期の壺口縁部の出土も貴重な発見である。一段上の第2河岸段丘上には寺垣遺跡群が展開しており、縄文時代草創期の爪形文土器が出土している。爪形文土器の出土量としては比較的まとまりおり、長野県内における最も良好な資料群のひとつである。

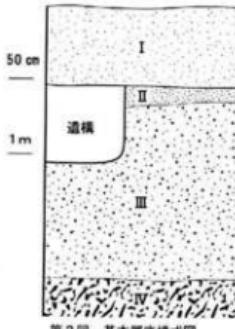
以上のように、西一本柳遺跡周辺では繩文時代～中世に及ぶ貴重な発見が多く、特に弥生時代中期～後期、古墳時代中期においては佐久地方の中核遺跡であったことが明らかとなりつつある。



第2圖 圖邊測點位置圖

第5節 基本層序

I層は耕作土であり、50cm前後の堆積が認められる。II層は湯川層の最上層にあたり、砂粒のみで構成される湯川層と浅間第1軽石流が拮抗したものであり、調査区全面に認められるものでない。III層は湯川層である。遺構はIII層まで掘り込まれ構築されており、遺構の壁面や底面には砂層が露出するため、極めて脆く、特に竪穴住居址の堀方調査時には大きな障害となる。第IV層は追分第1軽石流の堆積層であるが、調査が及ぶことはない。



第3回 基本層序模式図

第6節 検出遺構・遺物の概要

遺構		遺物
竪穴住居址	弥生—20軒、古墳—4軒	土器（弥生・土師器・須恵器）
	奈良・平安—3軒、不明—8軒	土製品（軋轆車・土製円盤）
掘立柱建物址	5棟	灰陶陶器
土坑	1基	石器・石製品（打製石鎌・磨製石族・石包丁・編み物石等）
溝	1条	金属器（刀子等）
Pit	27基	

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

○H1号住居址

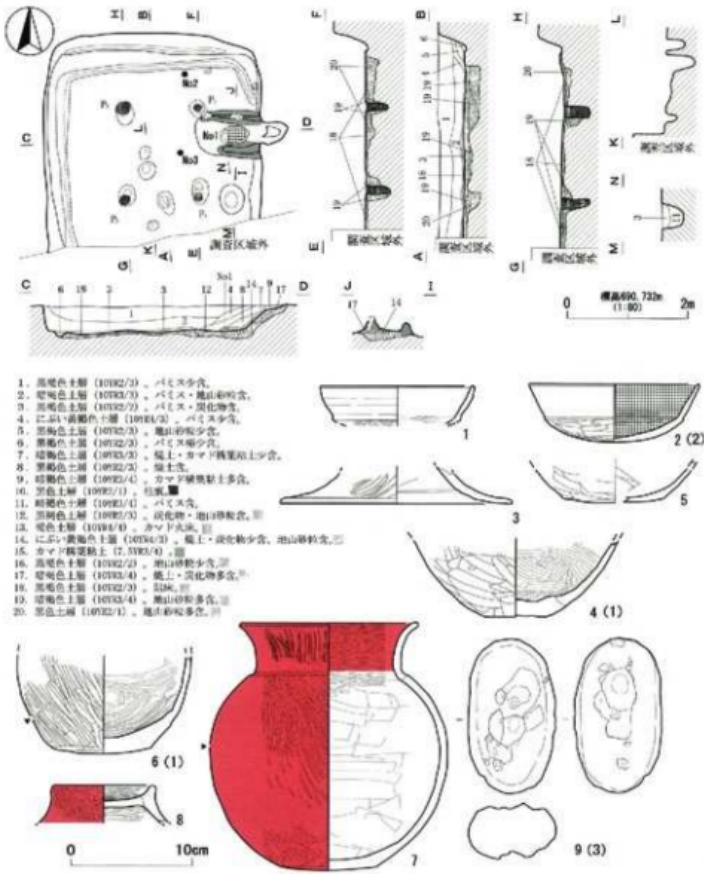
本址は、D2グリットで検出された。H2・H3号住居址を切って構築されている。全容は不明であるが、N-2°—Eに長軸方位をとる隅丸長方形のプランを呈するものと思われる。カマドは北壁の中央ではなく、北に片寄って粘土と石により作られている。主柱は床面の中央部分に均等に4本が配置されており、径はφ 12~18cmであった。また、カマドの南壁には、貯蔵穴と思われる掘り込みが存在する。短軸と思われる東西長は3.4m、壁残高は最大で42cmであった。また本址は抵張されていることが、堀方から検出された旧住居の周溝等から明らかとなった。

出土遺物には土師器、両面に敲打による2ヶ所の凹を有する軋石製凹石が認められる。环は須恵器環蓋標印形環であるが、臺には「武藏壹」の粗形が認められることから、本址の年代は古墳時代後期7世紀と思われる。

○H2号住居址

本址は、D2グリットで検出された。H1号住居址に切られ、H3号住居址を切って構築されている。全容は不明であるが、N-14°—Eに長軸方位をとる。短軸（東西）長は4.75m、壁残高は最大で35cmである。主柱は床面中央に南北3.1m、東西1.62mの長方形に均等に配置されている。1本のみ確認できた柱の径はφ 14cmであった。棟持柱の有無や、出入口については不明である。炉は北側主柱間の中央から80cmほど南寄に存在し、1個の縁石を有する地焼炉である。また、壁下には断続的に周溝が回っている。

出土遺物は全て弥生土器であり、器種的には鉢、高杯、甕、壺が認められる。赤彩の隆盛、壺底部下半の枝を有す括れや颈部の「T」字文、甕の颈部巻状文、口縁部及び体部の梅描波状文の施文などから、本址は弥生時代後期半箱清水期の住居址と思われる。



第4図 H3号住居址

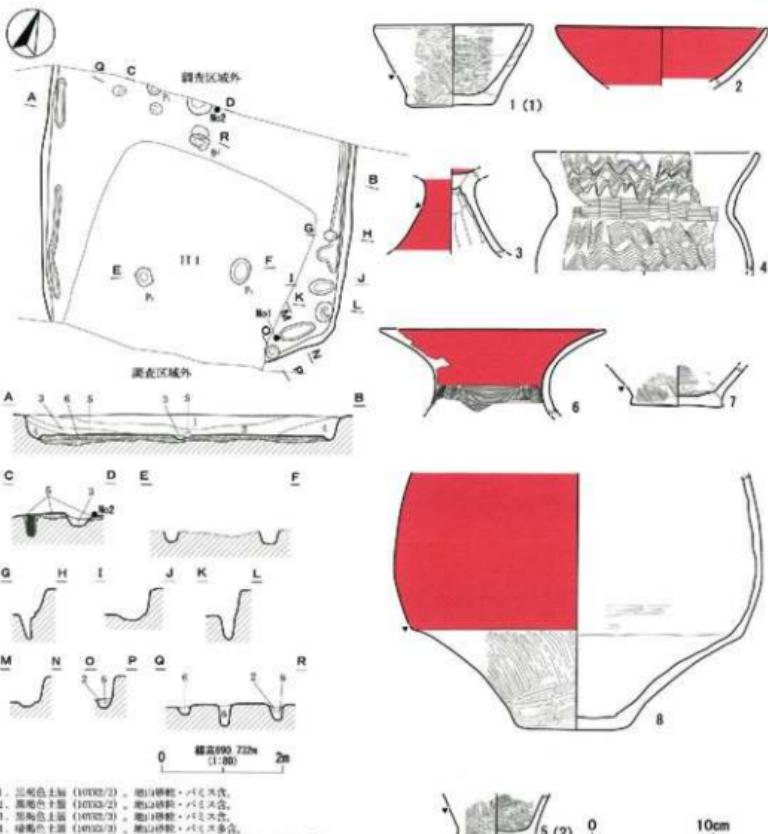
○H3号住居址

本址はE 2グリットで検出された。H1・H2・H5号住居址に切られ、H4号住居址を切って構築されている。長径・短径・傾斜方位等は不明であるが、主柱は南北3.6m、東西2.0mの長方形に均等配置されている。確認された主柱の径は約14~22cmであった。壁残高は最大10cmである。柱は主柱の構成する長方形の中央部から北西方向に若干片寄りて存在し、地焼炉である。内面には土器片が散かれていたらしい。壁下には断続的に周溝が回る。周溝とは別に、「Г」状に曲がる間仕切り状の溝が南東部分に掘削されている。また、P5やP6の存在から本址は建替えられている可能性が高い。

出土遺物は弥生土器と黒耀石の剥片、粘板岩製の石包丁の破片が認められる。弥生土器には甕と壺が認められる。土器の文様の特徴から、本址の年代は弥生時代中期後半栗林期と思われる。

○H4号住居址

F 2グリットで検出された。H3・H5・H7住居址に切られ、床面とPit 1基のみが確認された。出土遺物は皆無であるが、重複関係や、過去の当遺跡の調査結果から推測される本址の年代は、弥生時代中期後半栗林期である。



第5図 H2号住居址

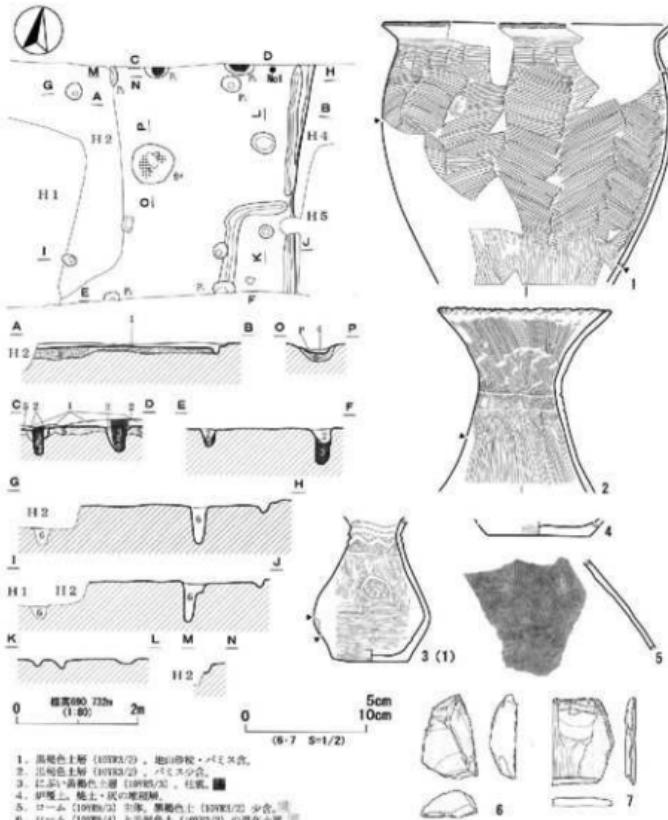
○H5号住居址

本址はF2グリッドで検出された。H3・H4・H7号住居址を切って構築されている。N-O°-Eに長軸方位をとる。長軸長は不明であるが、短軸長（東西長）は3.3mを測り、壁残高は最大で22cmである。カマドは北壁の中央やや東寄りに粘土と石により構築されている。主柱は東西壁の中央部分に配置されており、掘方は壁外に向かい斜めに掘り込まれている。柱そのものは確認できなかった。

出土遺物には土師器、須恵器と混入品の黒縞石製の石鏡が認められる。土師器は全て壺であり、武藏壺である。小形の壺も器形は鉢状を呈し、武藏壺本来の器形ではないが、薄い器壁や、ヘラケズリ溝等、色斑等は武藏壺そのものである。須恵器は壺、壺、坏が認められる。須恵器壺の底部に認められるヘラ切り痕や、武藏壺の器形の特徴等から、本址の年代は奈良時代と思われる。

○H6号住居址

本址はG2グリッドで検出された。H7号住居址を切って構築されている。N-82°-Wに長軸方位をとる開丸長方形の平面形を呈するものと思われる。長軸長（東西長）は42m、壁残高は最大50cmの規模を有する。Pitは複



1. 黒褐色土層 (H3-2)。地山砂岩・バニッ合。
2. 出掘色土層 (H3-2)。バニッ合。
3. リム (H3-2)。柱乳・柱頭部。
4. 壁壇上・壁・底・壁頭部。
5. フーム (H3-2) 主張、基盤高さ (H3-2) 少含。
6. リム (H3-4) と出掘色土 (H3-2) の混在土層。■

第6図 H3号住居址

数検出されたが、主柱穴は特定できない。炉は西壁中央と思われる壁下の70cm東側に構築されており、円形の地焼炉であるが、東に線石を1個倒す。また、炉内には底の底部部分が据えられていた。周溝は有さない。

出土遺物には、弥生土器と石器が認められる。石器には、砥石、磨製石鎌、磨製石錐の製作工程で生じた石材片、石包丁が認められる。石包丁は、本来の形状とは異なるため、別の機能を有した石器かも知れない。土器の器種には鉢、高杯、甕、壺が認められる。壺体部過半の稜を為す括れや、頸部瘤状文、口縁部、体部柳描波状文で構成される甕の文様などから、本址の年代は弥生時代後期後半稍清水期と思われる。

○H7号住居址

本址はG 2グリットで検出された。H 5・H 6号住居址に切られ、H 4号住居址を切って構築されている。規模は不明であるが、壁残高は最大で12cmを測る。壁下には周溝が回っている。床面上には炭化物の散布が認められた。H 6号住居址の掘方から、本址の主柱穴が2基検出されたが、柱は確認されなかった。

出土遺物には弥生土器と石器が認められる。石器は安産岩の河床礫の剥片に加工を加えたもので、片面には表皮が残っている。これとは別に石器ではないが、黒曜石の剥片も1点出土した。弥生土器の器種には甕と壺が認められる。甕の口唇部に施される繩文や、無文の口縁部文様等、体部に施される継縫の柳描波状文等から、本址の年代は弥生時

代中期後半聚落期と思われる。

○ H8号住居址

本址はH2・H3グリットで検出された。調査範囲内においては重複関係は認められない。N-10°-Wに長軸方位をとる隅丸長方形の平面プランを呈する。長軸長6.7m、壁残高は最大で20cmを測る。主柱は床面に長方形に4基が均等に配置されるものと思われるが、1基は調査区外に位置するため検出されなかった。南北が長径となり29m、短径（東西）は1.7mである。柱は確認されなかった。炉は北側の主柱穴間に構築された地焼かで縁石を伴っている。平面形態は「雪だるま」状である。出入口と思われるP6、P7の2基のPitが南壁下80cmに認められ、棟持柱が立てられたと推測されるP4、P5の2基のPitが、住居址の長軸線上の北端と南端に存在する。

出土遺物は多い。その大半は弥生土器によって占められる。器種的には鉢、高杯、壺、壺である。鉢には赤彩されるものと、無彩のものが存在する。高杯は坏部に棱は有さない。また、脚には透かしなどは認められず長脚ではない。壺は頭部腹状文、口縁部・体部に櫛描波状文が施されるものが多いが、口縁部文様帯が無文のものや、体部文様帯のみ櫛描波状文が上に重複せず、上2段は上下左右の振幅を小さく、下2段は上下左右の振幅を大きくした波状文を2段構成で施すものや、体部上半には櫛描波状文、下半には斜走文を施すものなどが認められる。また、絶じて壺の口縁部は短いものが多い。壺は赤彩されるものが多く、無彩のものは少数である。文様帯は頭部と口唇部外間に認められるが、口唇部外側の文様帯は持つものと持たないものがある。施文は櫛描波状文か、櫛による斜線である。頭部文様帯はほぼ全てのもののが有しており、施文は櫛描腹状文と波状文の組み合わせや、斜走文の多段構成であり、「T」字文は認められない。また、体部下半の棱は折れていない。以上のような土器の特徴から、本址の年代は弥生時代後期前半吉田期と思われる。その他に土器片円盤、磨製石鎌やその石材及び、製作時に生じた剥片、製作に使用した石器やその他の打製石器、黒曜石などが出上している。

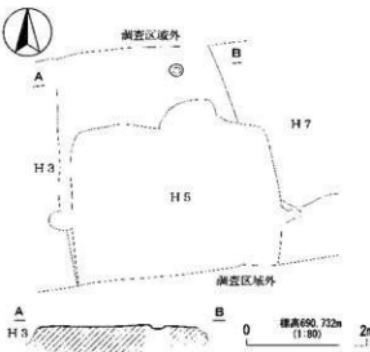
○ H9号住居址

本址はH6・I6グリットで検出された。F1号掘立柱建物址に切られ、H10、H11分件居址を切る。N-12°-Wに長軸方位をとる隅丸長方形の平面プランを呈する。長軸長6.4m、短軸長5.8m、壁残高が最大35cmの規模を有する。主柱穴は長方形に4基が床面上に配置されるものと思われるが、2基は調査区外に位置するため、2基(P1-P2)が検出された。柱は確認されなかった。棟持柱も長軸線に沿って、北壁下(P3)と南壁下(P4)に検出されている。出入口施設は調査範囲内には存在しなかった。炉は長軸線上の北側の主柱穴間にと思われる位置に構築されていた。方形に近い円形の平面形状の地焼かがあり、4個の砾石が北側が開放する「コ」字状に配置されている。周溝は有さない。

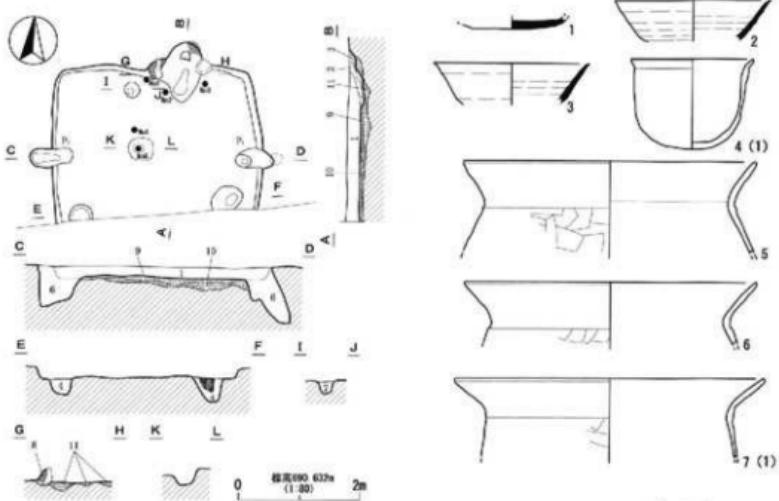
出土遺物は弥生土器と石器、鉄器である。弥生土器には鉢、高杯、壺、壺の器種が認められる。鉢は口唇外間に櫛描は波状文が施され、赤彩される。高杯は赤彩され、坏部に棱は持たない、また口縁部も屈折しない。壺は頭部腹状文、口縁部・体部に櫛描波状文が施されるものの他に、頭部下に櫛描波状文を施し、口縁部には口唇部外間に一回りの櫛描波状文を施すだけで、それ以下頭部までを無文帯とするものも存在する。壺は赤彩されるものと無彩のものが存在する。1点のみ体部に綴位の櫛刺突列による施文が認められるもののが存在するが（この土器は頭部下に焼成前に穿たれた円形のφ5mmの孔が対角線上に2対4ヶ認められ、土器の横断面が円ではなく梢円形に作られており、特殊な点である）、その他は頭部にのみ文様帯を有するようであり、ヘラ状工具による斜線文が多段に施文される。以上のような土器の特徴から、本址の年代は弥生時代後期前半吉田期と思われる。なお、石器は河床疊を利用して四石や、敲石、磨石、磨製石鎌やその石材及び、その製作時に生じた剥片などである。鉄器は鐵で有茎で、繋箭の繋身平面形を呈するが、本址に伴うか否かは判断できない。

○ H10号住居址

本址はH6グリットで検出された。II9号住居址、F1号掘立柱建物址に切られる。長軸方位、長軸長、短軸長等は不明である。壁残高は最大で10cmを測る。H9の掘方から検出されたP1とP2が、4基の主柱穴の内の2基と



第7図 H4号住居址



1. 黒褐色土層 (1092/3)。バニス・進山砂粒多含。
2. 緑褐色土層 (1092/2)。バニス・灰土多含。
3. 紅褐色土層 (1092/4)。進山砂粒含。
4. 緑褐色土層 (1092/1)。進山砂粒含。
5. こぶれ紅褐色土層 (1092/2)。柱頭。■
6. 茶褐色土層 (1092/3)。三段式アーチ。進山砂粒・バニス多含。
7. 茶褐色土層 (1092/2)。柱頭・柱脚。
8. 黑褐色土層 (1092/3)。カット跡見出。
9. 紅褐色土層 (1092/2)。地山砂粒多含。
10. 紅褐色土層 (1092/4)。進山砂粒含。■
11. 緑褐色土層 (1092/3)。進山砂粒含。■

第8図 H 5号住居址

と思われる。柱間は28mを測るが、柱は確認されていない。柱・周溝は調査範囲には存在しなかった。

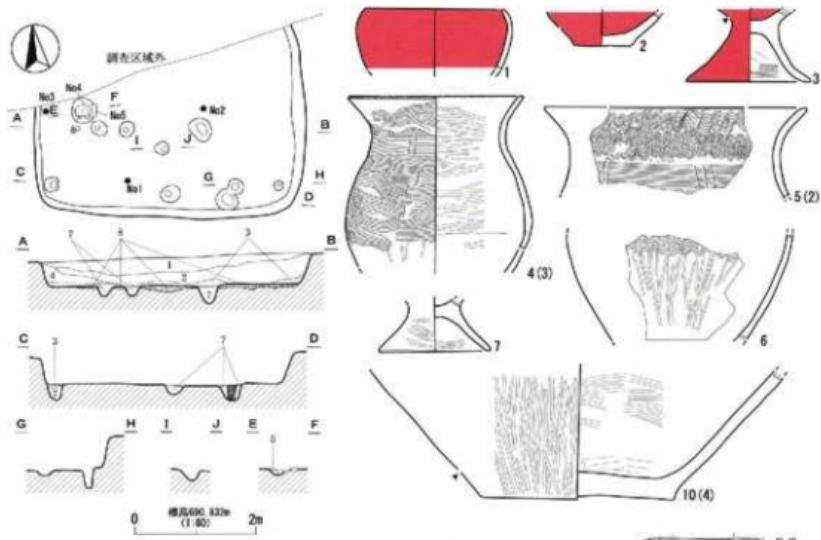
出土遺物は少ない。全て弥生土器であるが、図示できたものは壺の体部片と底部片だけである。赤彩や文様は認められず、本址の年代を類推する根拠とはならない。

○H 11号住居址

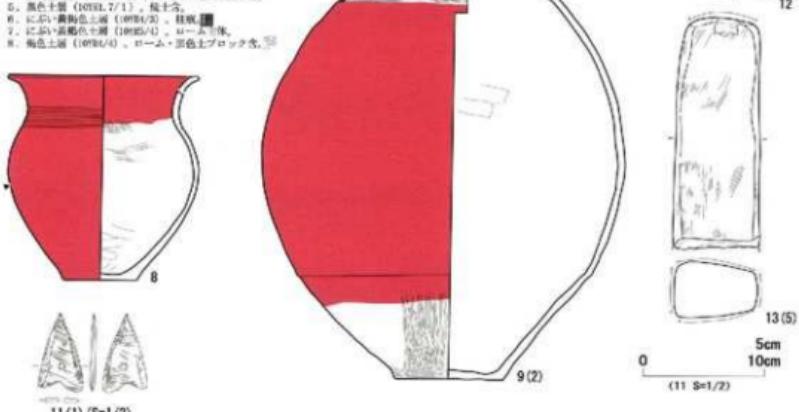
本址はH 5グリットで検出された。床面の一部分が残存していたため、H 9、H 12号住居址との新旧関係は判断しかねる。以上の状況のため、出土遺物も皆無であり、規模、年代等は不明である。

○H 12号住居址

本址はH 4グリットで検出された。H 11号住居址と重複関係を有するが、新旧は判断しかねる。また、一部分が調査されただけであり、本址を住居址とする根拠が乏しいことも事実であるが、便宜的に住居址として取り扱う。規模は不明であるが、壁残高は最大で28cmを測る。出土遺物も皆無なため、年代は不明である。



1. 黒褐色土層 (109B2/3)。ハミス・ローム含。
2. 暗褐色土層 (109B2/4)。バスク・ローム・炭化物含。
3. 深褐色土層 (109B2/7)。炭化物含。
4. 黑褐色土層 (109B2/2)。ハミス・地山砂岩少含。
5. 黑色土層 (109B1/7)。粘土・柱状。
6. にぶい黄褐色土層 (109B4/2)。柱状。
7. にぶい黄褐色土層 (109B5/4)。ローム含。
8. 海色土層 (109B6/4)。ローム・泥色土ブロック含。

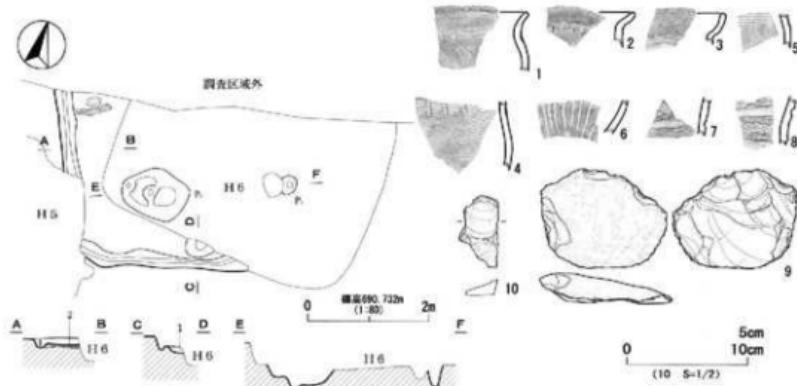


第9図 H 6号住居址

○H 14号住居址

本址はG 6グリットで検出された。H 15号住居址に切られる。調査範囲が住居址の一部分であるため、規模は不明である。壁残高は最大で30cmであった。

出土遺物には、弥生土器と磨製石器の製作時に生じた洞片が認められる。弥生土器には鉢、甕、壺の器種が存在する。鉢は赤彩されている。甕は颈部に籠状文をもち、口縁部と体部に柳描波状文が施されるものと、口縁部～体部まで柳描波状文が施されるものが存在する。籠状文をもつものは折返口縁である。壺は赤彩され、体部下半の縁は弱く括れている。以上の土器の特徴から、本址の年代は弥生時代後期後半稍清水期と思われる。



1. 黒褐色土層 (10H2/1)、地山砂質・パミス・炭化物含。
2. 赤褐色土層 (10H3/4)、地山砂質・パミス含。

第10図 H7号住居址

○H15号住居址

本址はF7グリットで検出された。H14号住居址、F2号掘立柱建物を切って構築されている。長軸方位、長軸長は不明であるが、短軸長は4.8m、壁残高は最大52cmの規模を有し、隅丸長方形の平面プランを有するものと思われる。カマドは北壁の中央と思われる位置に設置され、粘土と石により作られている。主柱は4本が床面上に長方形に均等に配置されており、柱間は南北20m、東西27mである。柱はφ18~24cmの規模である。周溝は有さない。また、掘方の調査により、主柱の建替と、東壁に周溝が確認され、平面規模の変更を伴わない上屋の建替が行われていることが判明した。

出土遺物には土器類、須恵器、石器、鉄器が認められる。土器には壺と壺の器種があり、壺は全て武藏窯である。器形的には口縁部に最大径を有する。壺は所謂「畿内系暗文壺」と半球状を呈するものが存在する。また、壺の底部を再利用した土器片円盤が1点出土している。須恵器には壺と高壺?があり、壺の底部にはヘラ切痕が認められる、また、本址の未調査部分で重複している住居址に伴うものか? 6世紀代の片壺が認められる。石器には織物石、敲石、磨製石簇や、その石材、あるいは製作過程で生じた剥片、黒耀石片などが認められるが、全てが本址に伴うものではない。鉄器には刀子の破片と断面四角形の環状を呈するものが出土している。以上の出土遺物から本址の年代は奈良時代と思われる。

○H16号住居址

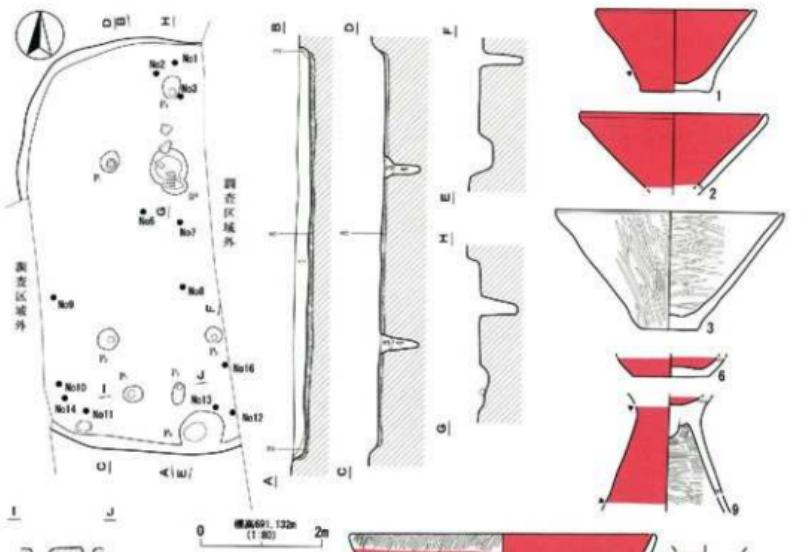
本址はC7グリットで検出された。H18号住居址を切って構築されている。長軸方位、長軸長は不明であるが、短軸長は5.0m、壁残高は最大20cmの規模を有し、隅丸長方形の平面プランを呈するものと思われる。本址は調査範囲内には認められなかった。主柱は2本検出され、柱間は東西2.6m、柱はφ18cmの規模であった。また、棟持柱と思われるP1-P3が検出されている。周溝は東壁下に認められた。本址は焼失家屋であり、覆土及び床面上から、多量の炭化材が検出されたが、予算及び期間の制約から、樹種の同定は行っていない。

出土遺物は本址が焼失家屋であったため、多量に認められた。土器は全て赤生土器であり、器種としては高壺・壺・台付壺・壺が認められる。石器は磨製石器を製作するための石材やそのための工具と思われるものや、その未製品、破損品と思われる。その他に、赤色顔料が東壁下の周溝上部からまとめて出土している。

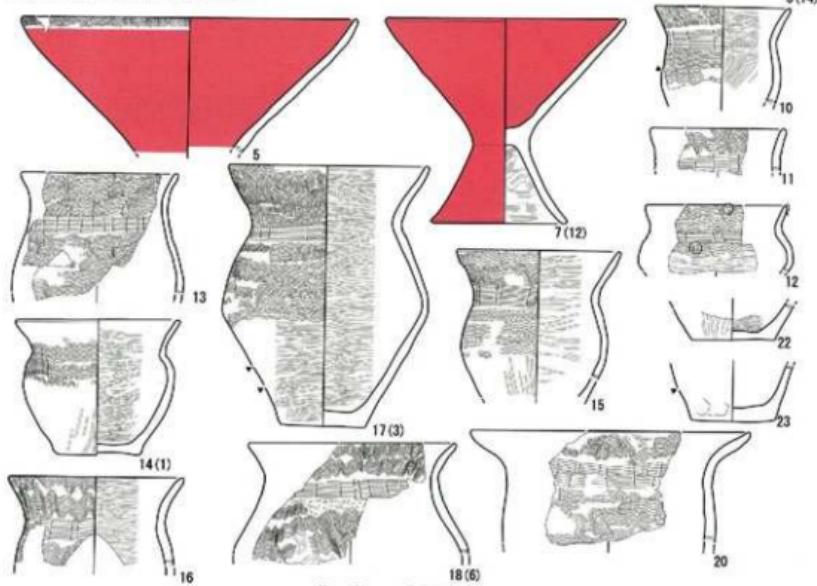
高壺の短脚、短い口縁部の壺、壺の胴部に施文される斜走文や、横位波状文を縦位に分割する横擡条線や波状文、口沿部、頭部に集約される壺の文様帶とそれが横位展開であること等から、本址は弥生時代中期後半至中期の所産と捉えられる。

○H17号住居址

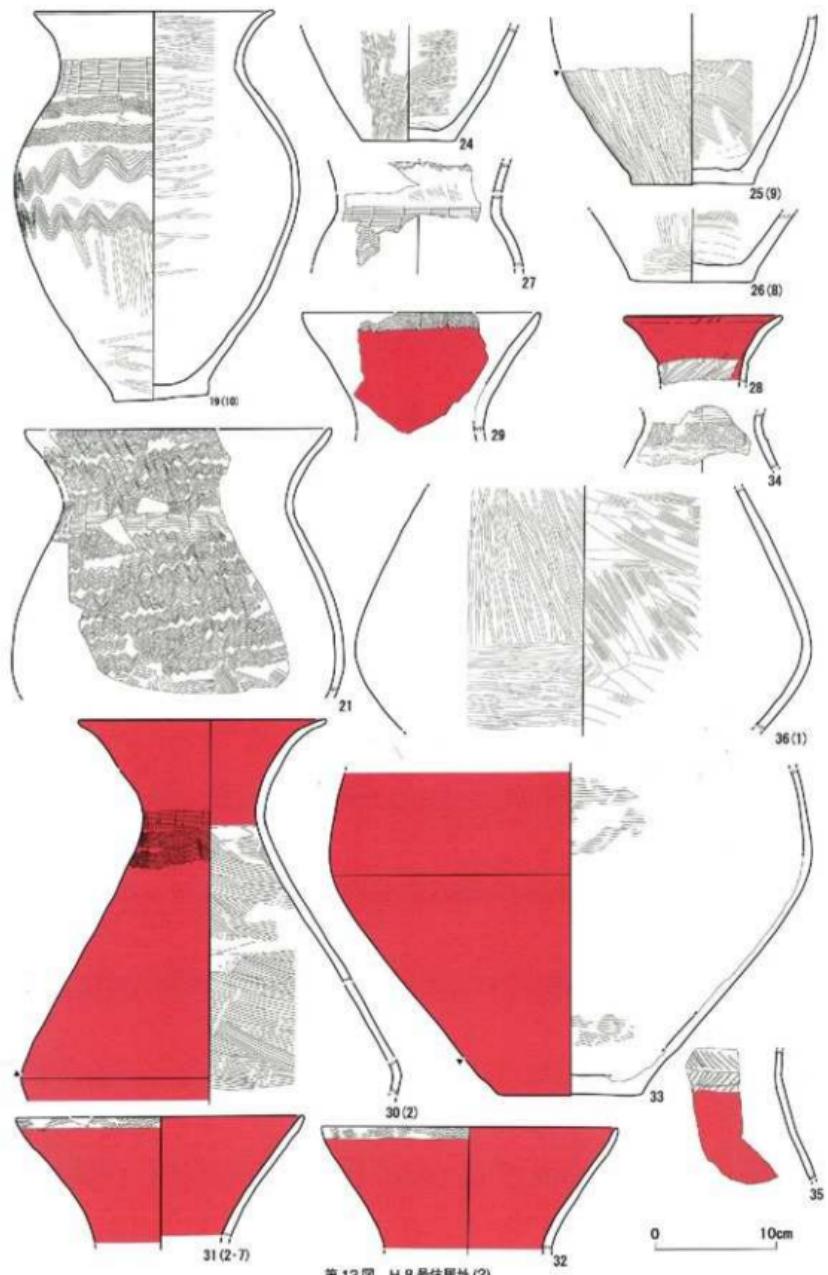
本址はB5グリットで検出された。H32-H33号住居址を切って構築されている。N-19°-Wに長軸方位をと



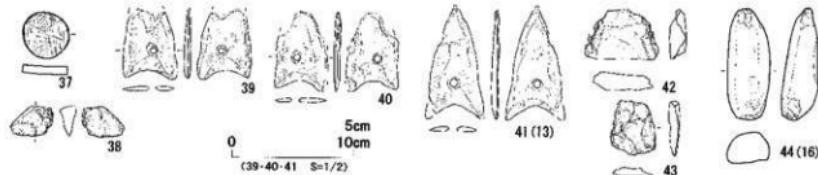
1. 黑褐色土層 (100mm/3)。壤土，腐化物質。
2. 墓褐色土層 (100mm/4)。地山砂較多。
3. 黑褐色土層 (100mm/3)。地山砂較少。
4. 黃色土層 (100mm/4)。地山砂極多。
5. 二至三黑褐色土層 (100mm/4)。地山砂極多。



第11回 H8号住居址(1)



第12図 H8号住居址(2)



第13図 H8号住居址(3)

る。長軸長—5.6m、壁残高80cmの規模を有する。主柱はP1・P2の2基が該当するものと思われる。柱間は南北—2.8mである。柱はφ21cmであった。カマド・炉址等は調査範囲からは検出されなかった。周溝は周査範囲の壁下には回らされていた。覆上の2層中には炭化物や灰、焼土が多含されていることから、住居の廃絶後上屋を焼去し埋設したことがうかがえる。

出土遺物には土師器、弥生土器、土製品・石器が認められる。弥生土器、土製品(紡錘車)、石器については本址に用ひものではなく、重複するH32・H33号住居址に帰属するものと思われる。土師器には壺・高壺・甕・壺蓋が認められる。12の甕は他のものと明らかに異なる胎土・色調・焼成が施されており、須恵器を模倣した土器である。搬入品であろう。壺の形態、高壺の形態と特徴的な暗文状のヘラミガキなどから、本址は古墳時代中期5世紀の住居址と思われる。

○H18号住居址

本址はC7グリットで検出された。H16号住居址に切られる。壁残高40cmの他は規模は不明である。主柱はP1・P2の2基であり、柱間は東西3.05mで柱はφ16cmである。P3、P4の2基は出入口である。調査範囲の壁下には周溝が巡らされていた。

出土遺物には、弥生土器と石器が認められる。弥生土器には高壺・甕・壺の器種がある。石器は砥石(10)と磨製石斧の再生品(11)が存在する。土器の特徴から、本址の年代は弥生時代中期後半栗林期と捉えられる。

○H19号住居址

本址はB8グリットで検出された。H20号・H35号住居址を切って、D3号土坑に切られる。N-3°-Wに長軸方位をとる。壁残高40cmの他は、規模は不明である。カマドは北壁の中央と思われる位置に検出された。石芯を粘土で被覆して構築されている。調査範囲には、主柱、周溝は存在しない。

出土遺物には土師器、弥生土器・甕の羽口片が認められる。弥生土器は混入である。土師器には高壺と甕の器種が認められる。高壺の特徴的な暗文状のヘラミガキから、本址は古墳時代中期5世紀の年代が比定される。

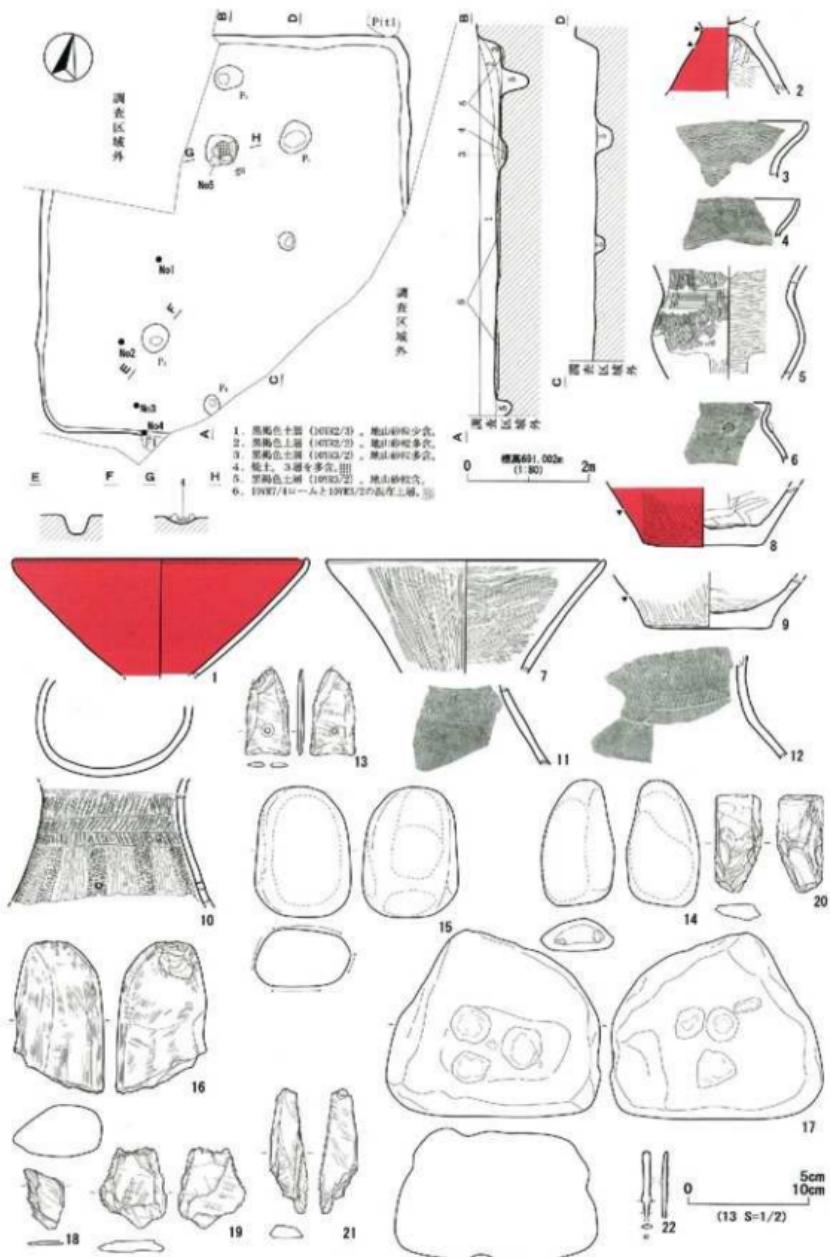
○H20号住居址

本址はB8グリットで検出された。H19号住居址に切られる。壁残高28cmの他は規模は不明である。主柱は2基検出され、柱間は南北—4.3m、柱はφ16~22cmである。壁下に周溝は認められない。また、炉址も調査範囲内には存在しなかった。

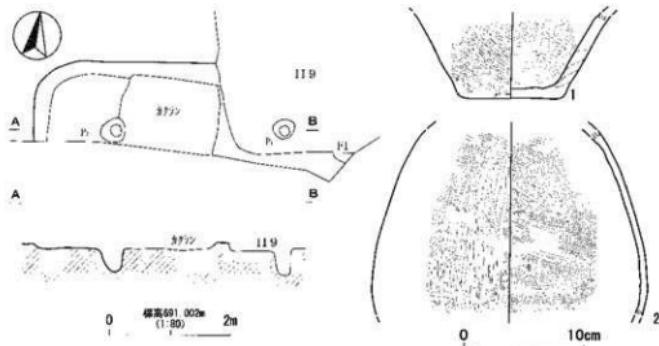
出土遺物には弥生土器と石器が認められる。弥生土器の器種には鉢・高壺・甕・台付甕・壺が認められる。鉢は円形あるいは楕円形の突起を口縁部に有し、内外面共に赤彩が施される。高壺も脚内を除き赤彩が施されるが、形態は不明である。甕は受口状の口縁部を量するものと、近く直線的に開くものが認められる。口縁部や口唇部には繩文が多く、体部には斜文文や「コ」字文が認められる。壺の口縁部は受口状を呈し、文様帶は口辺と頸部に集中する傾向が認められる。赤彩は施すものと、施さないものが存在する。石器には磨製石器の未製品と磨・敲石が認められる。土器の特徴から、本址の年代は弥生時代中期後半栗林期が比定される。

○H22号住居址

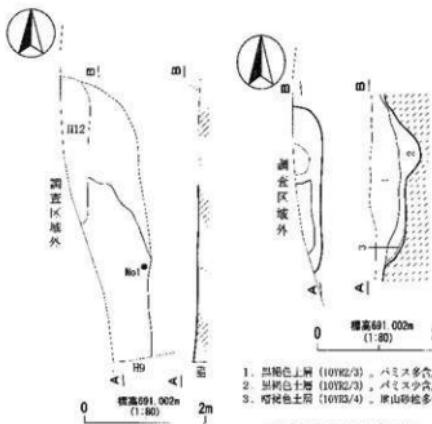
本址はC12グリットで検出された。F4号掘立柱建物址・M1号溝址に切られる。N-9°-Eに長軸方位をとり、平面形は梢円を呈する。長軸長は不明であるが、短軸長4.35m、壁残高25cmの規模を呈する。主柱は4基が住居中央に均等に配置されており、柱間は南北—3.0m、東西—1.8~2.3mである。柱の規模は把握できなかった。周溝は



第14図 H9号住居址



第15図 H 10号住居址



第17図 H 12号住居址



第16図 H 11号住居址

東壁と北西コーナーの壁下を除き断続的に構築されている。P5は棟持柱、P6・P7も上部を支える機能を有するものと思われる。炉址は、このP6・P7を結ぶ直線上で、かつP1～P4により構成される方形容の中心に構築されており、地爐窟であった。本址の掘方からは、旧住居が検出された。

旧住居は、本址よりも40cmほど南方向に小さな規模で構築されているが、炉址を含む南半分に位置するPitは連続していないため、北半分を伸長させ住居を拡張したものと思われる。

出土遺物には弥生土器と石器が認められる。弥生土器には鉢・高杯・壺・台付壺・蓋が認められる。鉢は内外面共に赤彩が施される。高杯は短脚で脚と杯の接合部である括りに刻目を施した隆筋が巡る。壺は口縁部が短く、口唇部に刻目や縦文が施される。II部は無文のものが多いが、8のように地文として縦文を施し、横書き波状文を1巡するものも存在する。頸部には縦状文を施すものが多く、体部には斜走文か横書き波状文が施される。壺は赤彩されるものと、されないもののが存在するが、されないものが上倒的に多い。縦文帯は口唇部と頸部に集中し、II部には縦文、頸部には並行沈線により区画された複数の縦文帯が施される。

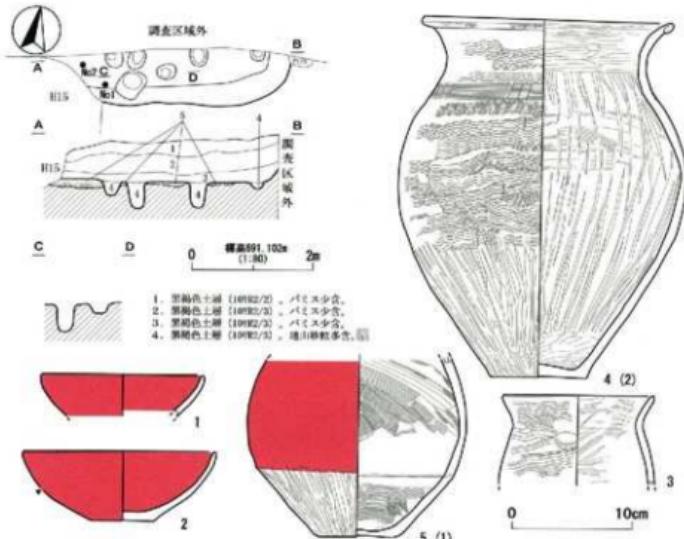
32・33のように体部に施文されるものも少數ではあるが存在する。33は他のものに比べ、体部が球形であり、口縁部の開きが少なく、異質な形態である。他地域の影響を受けているのかもしれない。石器は31の黒耀石製打製石錐や38の紡錘車の木製品を除き、磨製石錐の木製品ないしは磨製石錐製作のための石材や工具と思われる。

本址の年代は上器の特徴から、弥生時代中期後半栗林期と思われる。

○H 23号住居址

本址はD 12グリットで検出された。F 4号掘立柱建物址に切られ、H 36号住居址を切って構築されている。遺構の僅かな部分を調査したに過ぎないため、その形態・規模等は不明である。壁残高は20cmであった。主柱・炉址・周溝のいずれも調査範囲内には認められなかった。

出土遺物には弥生土器が認められ、器種としては鉢・高杯・壺が認められる。1の高杯は内外面に赤彩が施され、II部には縦文が認められる。2の鉢は内外面に赤彩が施される。壺は5・6共に受口状のII部を呈し、口縁部とII部には縦文が施され、6はさらに1条の横書き波状文が巡らされている。3は頸部に横書き波状文、6は縦状文を巡らせている。6の体部は不明であるが、3は斜走文が施されている。以上のような出土土器の特徴から本址の年代は、弥生時代中期後半栗林期に比定される。



第18図 H 14号住居址

○H 24号住居址

本址はF 4グリットで検出された。調査範囲においては、他造構との重複関係は認められない。N=21°-Eに長軸方位をとり、28cmの櫛残高を有する。主柱はP1-P3の3基が検出された。おそらく4基の主柱が住居中央に均等に配置されているのである。柱間は南北-3.0m、東西-1mである。柱はφ16-22cmの規模であった。炉址はP1の東や南よりの位置に検出された。北を開放した「コ」字状に4ヶの河床疊が組まれている。P6は棟持柱、P4-P5は出入口であろう。調査範囲には周溝は認められず、掘方からも旧住居等は検出されなかった。

出土遺物には弥生土器と石器が認められる。弥生土器には高杯・甕・壺の器種が存在する。高杯は脚部のみの出土であるが、柄の開きが弱い長脚のもので、外面は赤彩が施されている。甕は頸部に横状文か波状文、口縁部と体部には波状文が施される。特徴としては、口縁部や体部の波状文が、文様帶内を充填するよう密に施されるのではなく、上下の重複が生じないよう一遍、一遍施されることや、狭い文様帶であることである。壺は底部のみの破片であり全容は不明であるが、赤彩は認められない。石器は磨製石器やその未製品や製作のための工具と思われるものである。

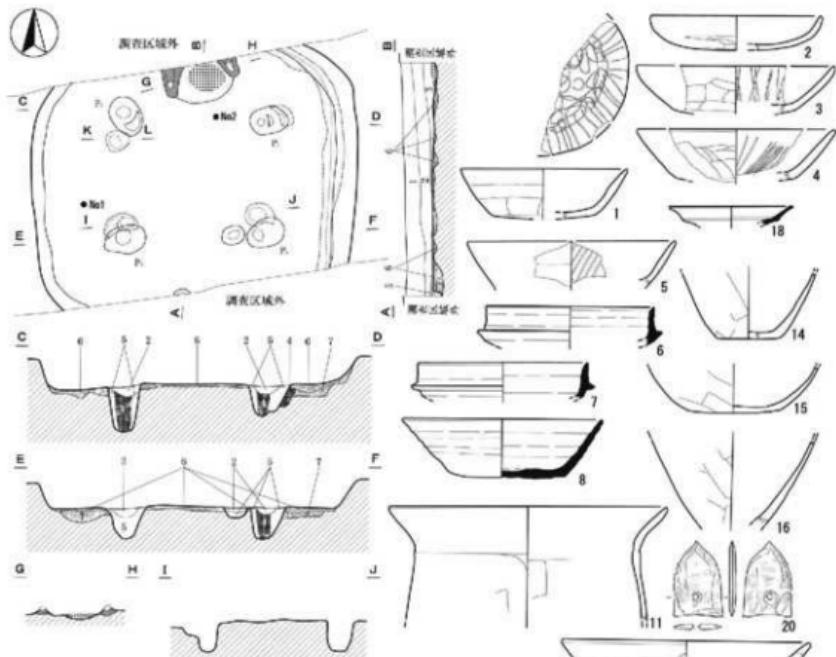
以上のような出土土器の特徴から、本址の年代は弥生時代後期前半吉田期に比定されるものと思われる。

○H 25号住居址

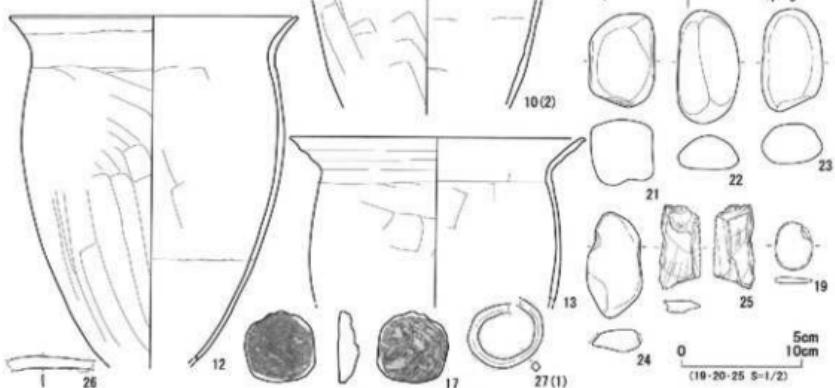
本址はD 5グリットで検出された。H 28号住居址を切って構築されている。長軸方位・長軸長・短軸長は不明である。壁残高は30cmの規模を有する。カマドは北壁の中央と思われる部分に、石芯を粘土で被覆して構築されていた。主柱はP1 1基が検出されたが、柱の規模は把握出来なかった。調査範囲においては、周溝がカマド部分をを除く壁下に認められた。

出土遺物には土師器と石器が認められる。土師器には、杯・鉢・甕の器種が認められる。杯は内面に放射暗文が施される、須恵器杯蓋模倣の形態のものである。ヘラミガキは施されない。鉢は逆様形を呈するもので、口縁端部がわずかに外反する。3は甕の可能性を有するが判然としない。甕には小型の4と、大型の5が認められる。いずれも砲弾状の体部を呈し、外面にはヘラケツリ調整が施される。石器は磨石ないし砥石の機能と敲石の機能を併せ持つものと、敲石の機能だけを有するものが認められる。表面に光沢を有するほど使い込まれたものもある。11は磨製石器の素材であり、混入である。

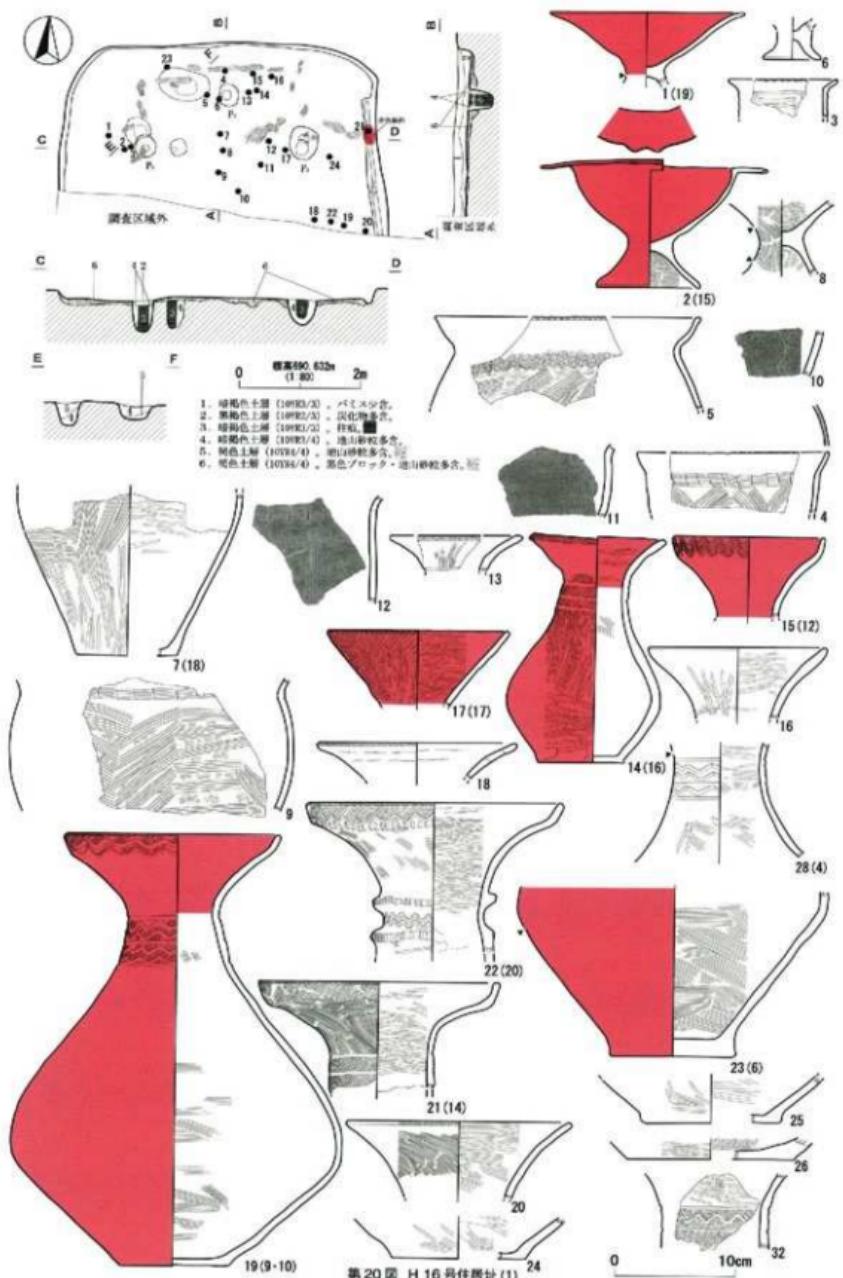
出土土器の特徴から本址の年代は、古墳時代後期7世紀が比定される。

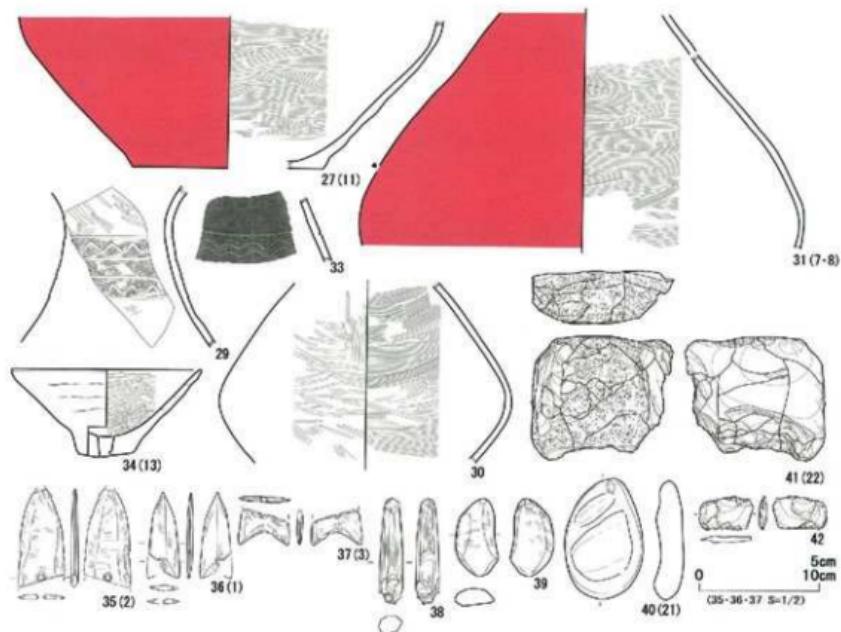


1. 泥鰌色土層 (10912/20) バイヌ多含。
 2. 混褐色土層 (10912/21) バイヌ少含。
 3. 黑褐色土層 (10912/22) 地上部。バイヌ少含。
 4. 黑褐色土層 (10912/23) 特性。バイヌ少含。
 5. 黑褐色土層 (10912/24) 地山斜面多含。
 6. 混褐色土層 (10912/25) 階段。地山斜面少含。
 7. 混褐色土層 (10912/26) 階段。地山斜面多含。
 ■ カマツ根莖軸 (10912/27)。



第19図 H 15号住居址

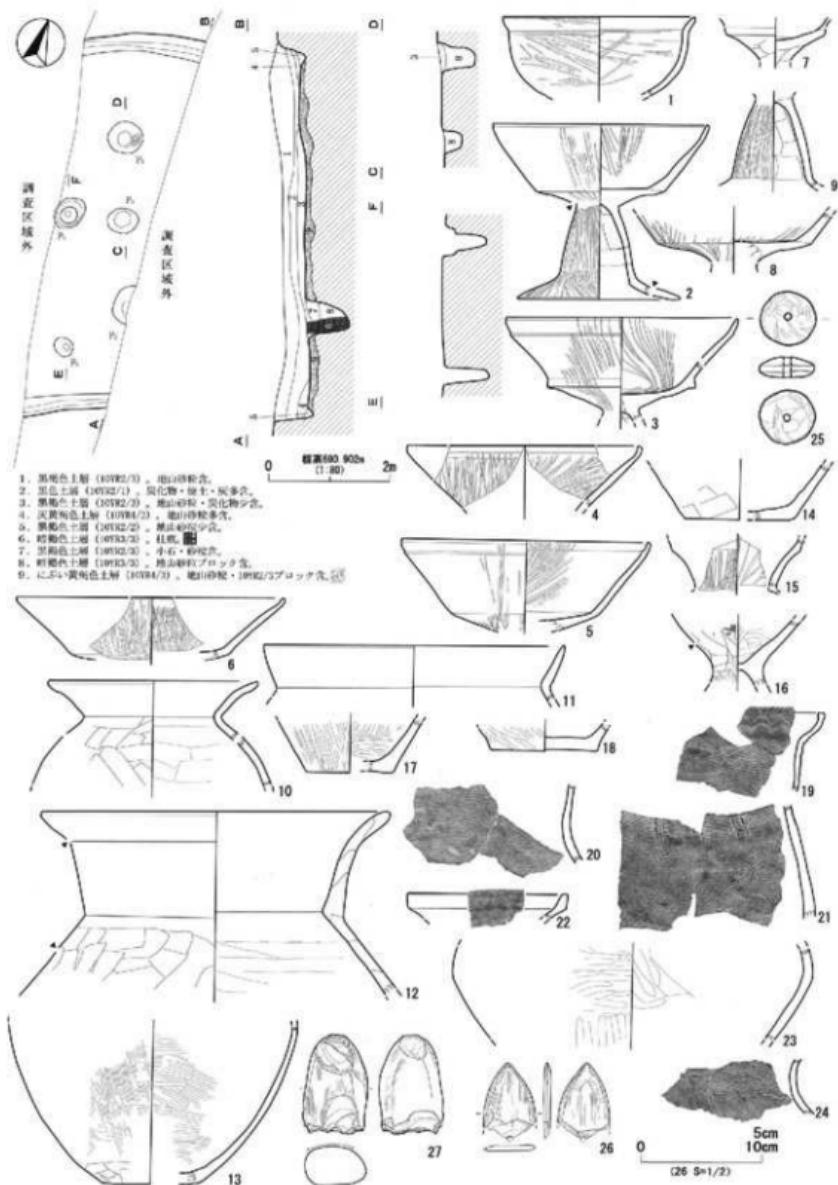




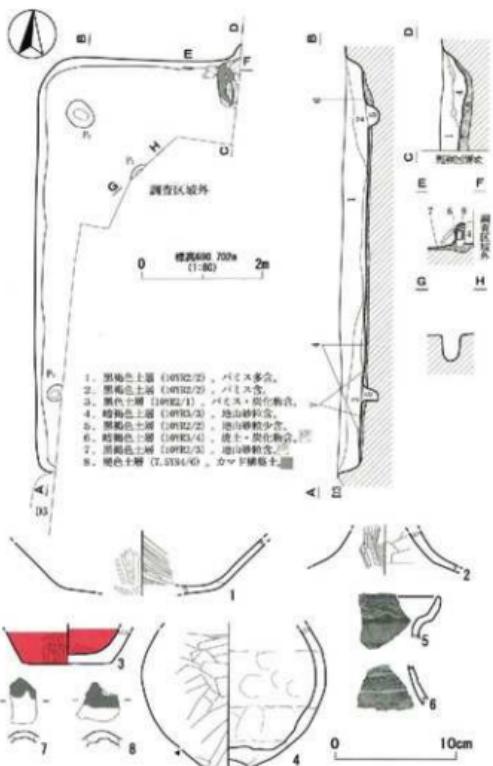
第21図 H 16号住居址(2)



第23図 H 18号住居址



第22図 H 17号住居居址



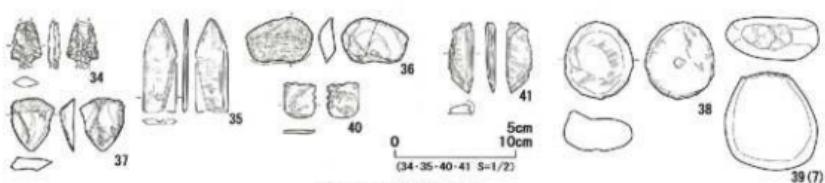
第24図 H 19号住居址

○H 26号住居址

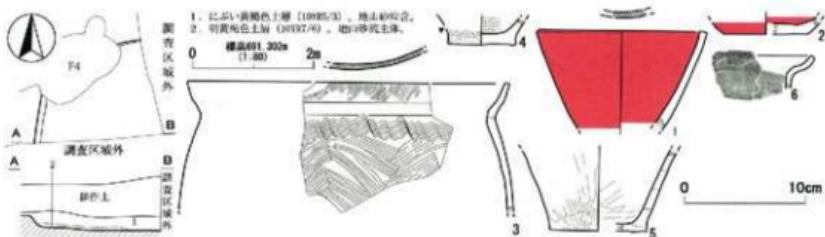
本址はD 4グリッドで検出された。H27号住居址を切って構築されている。壁残高18cm以外は形態・規模等は不明である。Pitが1基検出されているが、性格は判断できない。調査範囲には周溝も存在しなかった。なお、本址の東南に貼床状の面が確認され、本址がこれを切っていることは確認できたが、この面が床面のみ残存した壁穴住居の可能性は強いものの、判断するにはあまりにも情報が少ないと認め、存在する事実のみを記載しておく。

出土遺物は極めて少なく、かつ断片的であるが弥生土器が出土している。1の、外面と内面口縁部に赤彩が施される盤型の小型の鉢は、口縁部に穿孔が認められる。2の壺は外面に赤彩が施される。3は壺の底部であるが赤彩は認められない。

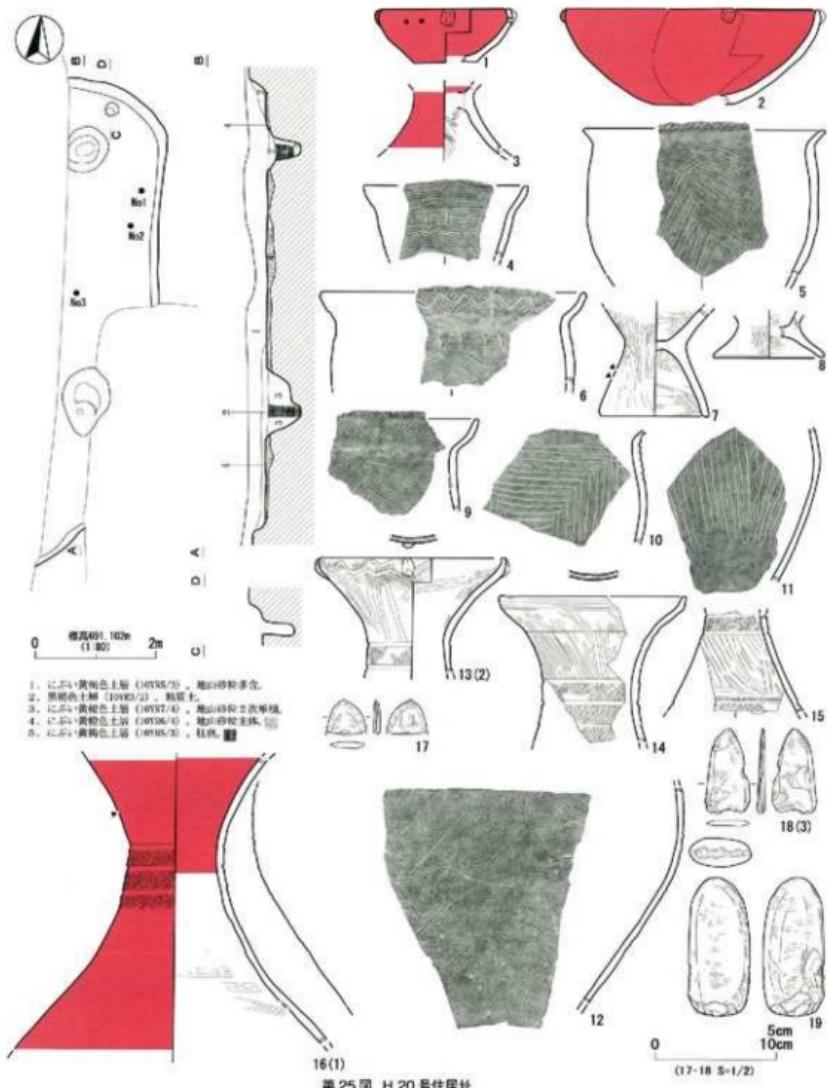
以上のような、極めて少ない情報量の出土遺物から本址の年代を比定することは困難ではあるが、弥生土器以外は出土していないことから、弥生時代の所産である可能性は極めて強い。さらに一歩踏み込んで、2の壺の口縁部が、口唇に縦文や刻目を有さないことや、強く外反する等の特徴を有することを積極的に評価するならば、本址は弥生時代後期吉田期に比定される。



第27図 H 22号住居址(2)



第28図 H 23号住居址

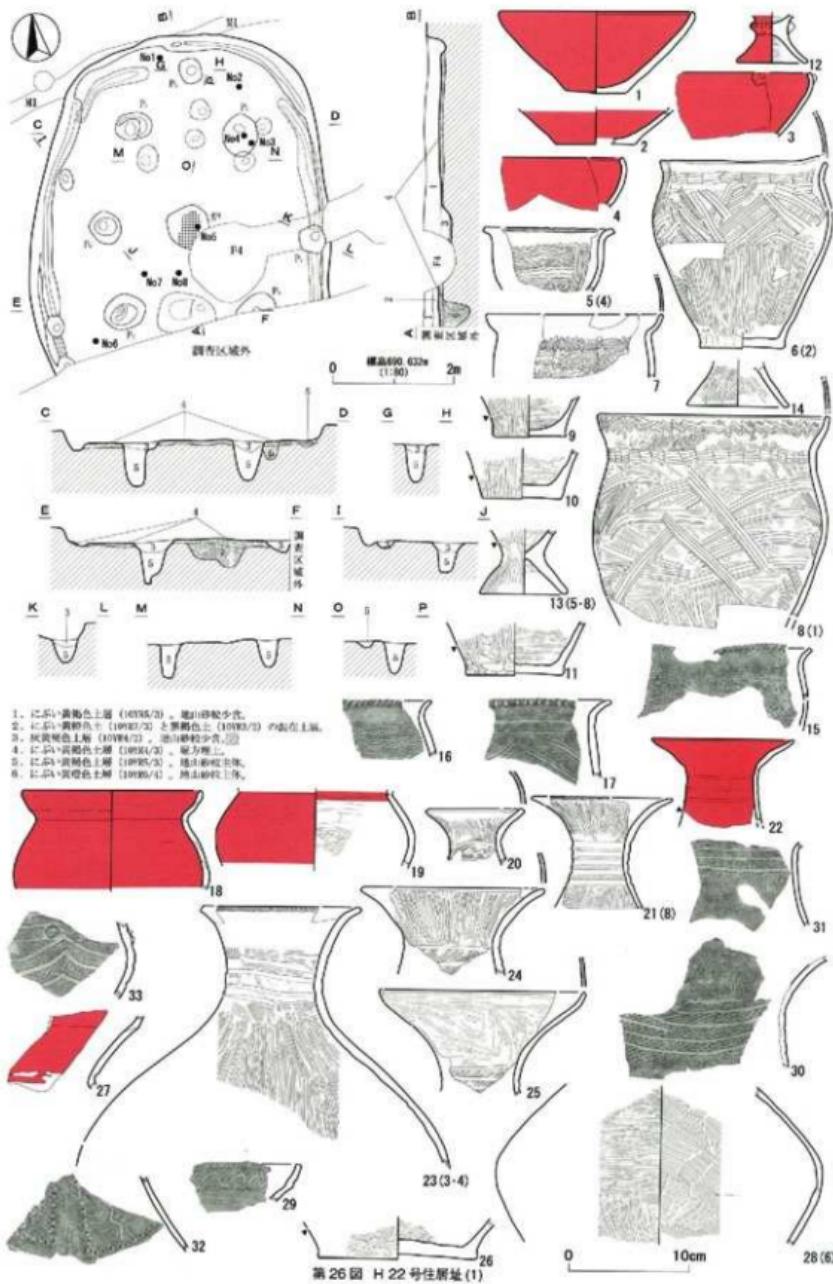


第25図 H20号住居址

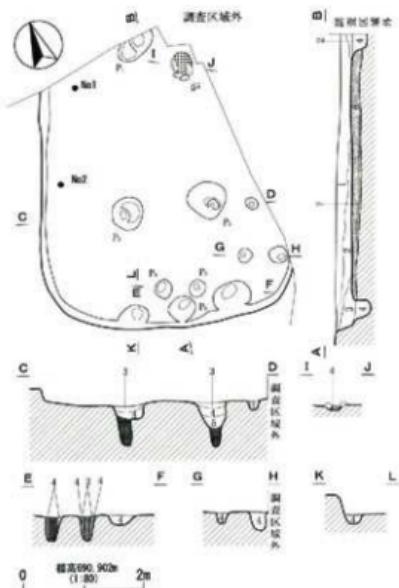
○H27号住居址

本址はC4グリットで検出された。H26-H28号住居址に切られる。壁残高10cmの他は形態・規模等は不明である。床面上から複数のPIと土坑が1基検出されたが、その性格や本量に本來帰属するものか否かも判然とはしないが、時期的には本址よりも古いものであることはない。炉址・周溝等は調査範囲には存在しなかった。

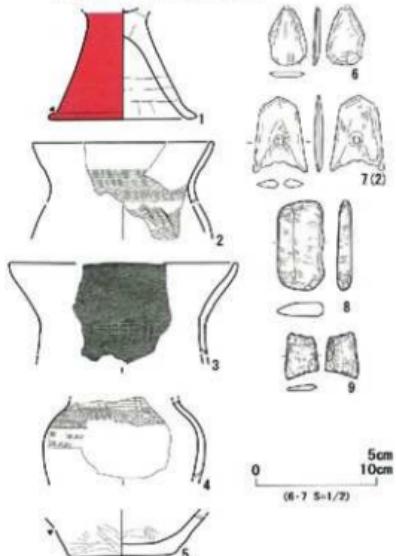
出土遺物には弥生土器が認められる。器種的には鉢・高杯・甕・壺が認められる。鉢は内外面赤彩が施される。高杯は脚部の破片であり、長脚で、外側が赤彩されている。甕には中期後半「栗林式」の3・5と後期「箱清水式」



第26図 H 22号住居址 (1)



1. 黒褐色土器 (109R/2)。コーム多点、人馬像土。
2. 黑褐色土器 (109R/2)。炭化物多、人馬像土。
3. 黒褐色土器 (109R/2)。自然堆積。
4. 黒褐色土器 (109R/4)。山形砂紋多点。
5. 黒褐色土器 (109R/2)。山形砂紋多点。
6. 黒褐色土器 (109R/2)。縦線。
7. 黒褐色土器 (109R/2)。山形砂紋多点。



第29図 H 24号住居址



1. 黒褐色土器 (109R/2)。焼成度少。
2. 黒褐色土器 (109R/4)。山形砂紋多点。
3. 黒褐色土器 (109R/4)。ローム・焼成砂紋の2次地殻。

第31図 H 26号住居址

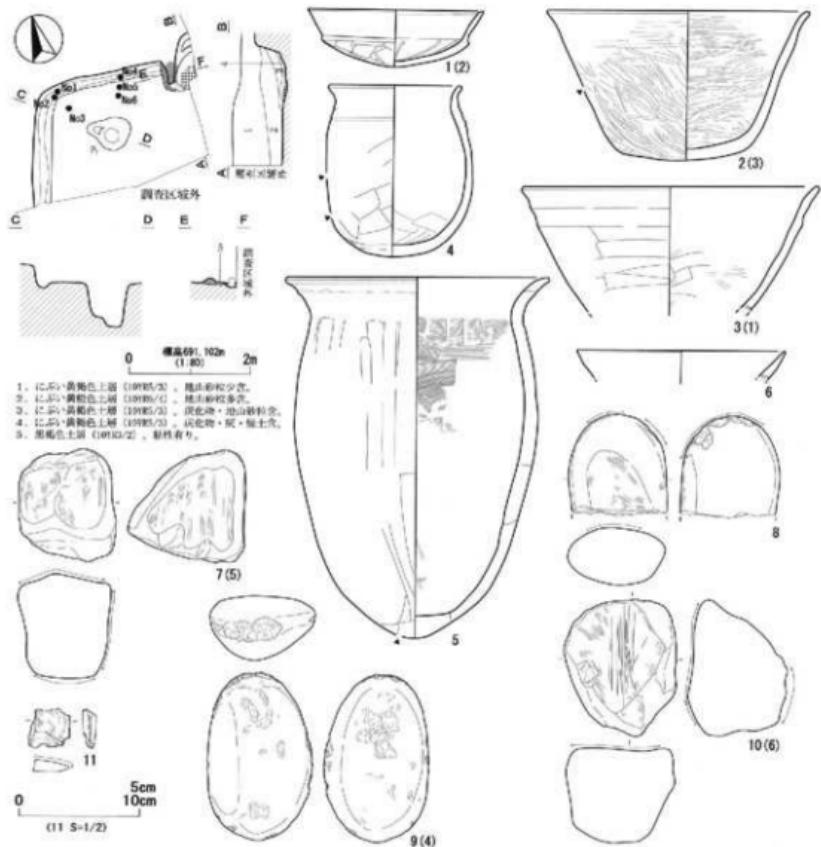
の4、6、7が認められる。3・5は受口状の口縁を呈し、3は口縁部～口唇部に網文を施し、更に口縁部に2条の波状文を施している。5は口唇部に刻目を施している。頭部には3は簾状文、5は波状文が施される。4・6・7は横描波状文が口縁部に密に乱雜に充填される。6は頭部に簾状文を施し、体部に再び密に乱雜に横描波状文が施されるが、7は頭部の文様帶を有さず、口縁部から連続して横描波状文が施されている。8は無頭の鉢である。粗い作りで、赤彩は施されない。9の壺は頭部に並行地綫による横位の文様帶を作り、その内部にヘラ描の斜行沈線が施されている。赤彩は施されない。

住居址の重複関係等から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産と思われる。

○H 28号住居址

本址はD 5グリットで検出された。H 25号住居址に切られ、H 27号住居址を切って構築されている。壁残高30cm以外の形態、規模は不明である。床面からはPitと土坑が各1基検出されたが性格は不明である。かき跡・周溝・主柱は調査範囲内には存在しなかった。

出土遺物には弥生土器と石器が認められる。弥生土器には鉢・壺・壺の器種が認められる。1の鉢は外外面に赤彩が施される。2の壺は受口状の口縁部を呈し、1条のヘラ描波状文が施される。頭部下には横描波状文が施されている。3は壺、8は横位の文様帶を有している。4は壺、5は横位の文様帶が展開している。7は口縁部に片口を有し、受口である。5は外外面に赤彩が認められる。6は佐久平では認められない形態であり、搬入品ないしは他地域の影響を受けているの



第30図 H 25号住居址

であろう。石器は10の砾石が出土している。北壁下の床面に下部を埋設し、直立した状態で出土した。表裏共に中央部分は光沢を有するほど使い込まれているが、太さや、深さが異なる様々な条線も無数に看取されることから、粗砾から仕上砥までの機能を有していたものと想像される。

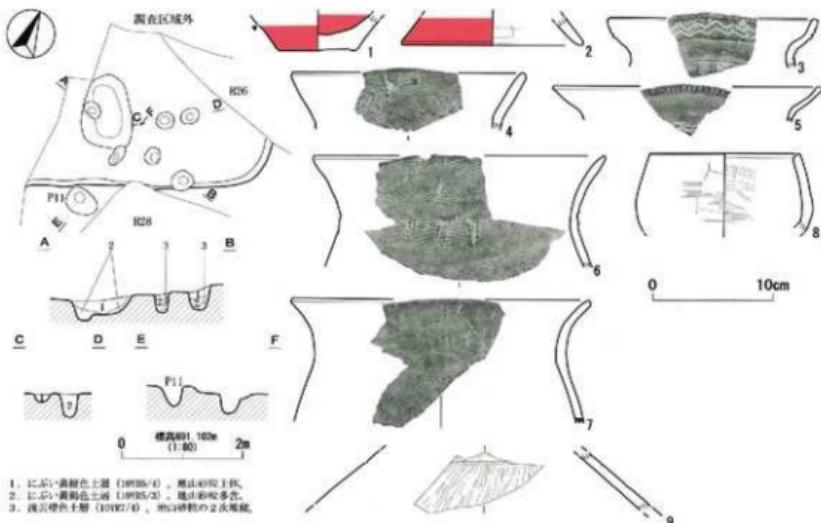
出土土器の特徴から本址の年代は弥生中期後半栗林期に比定される。

○H 29号住居址

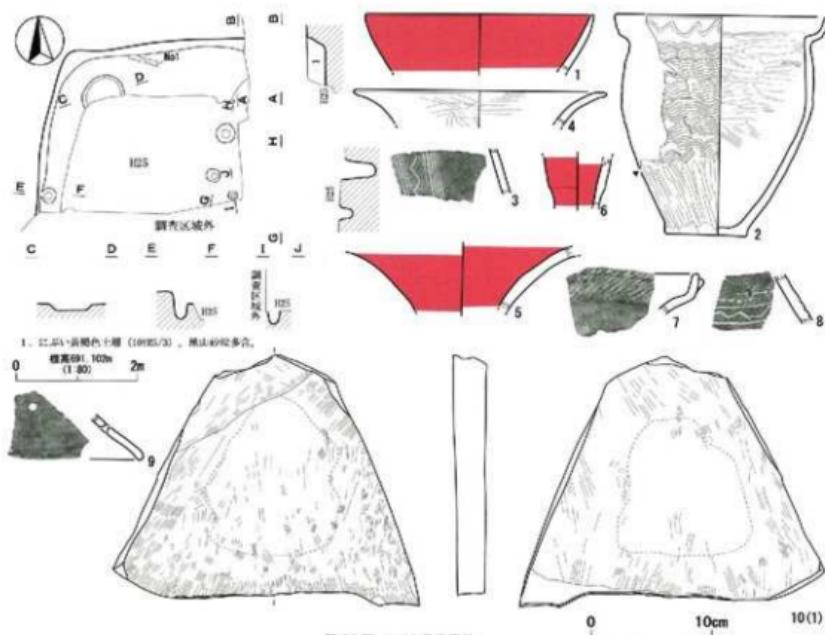
本址はE 4グリットで検出された。壁残高46cmの他は形態・規模は不明である。調査範囲の床面上からは主柱・炉址・周溝等は検出されなかった。

出土遺物には弥生土器と土製品が認められる。弥生土器は全て壺であるが、出土した3点全てが体部下の破片であるため、文様は不明である。また、残存部位に赤彩は認められない。土製品は4の土器片円盤が出土している。赤彩が施された壺の体部を、隅丸方形に周縁を打ち欠いて整形したものである。

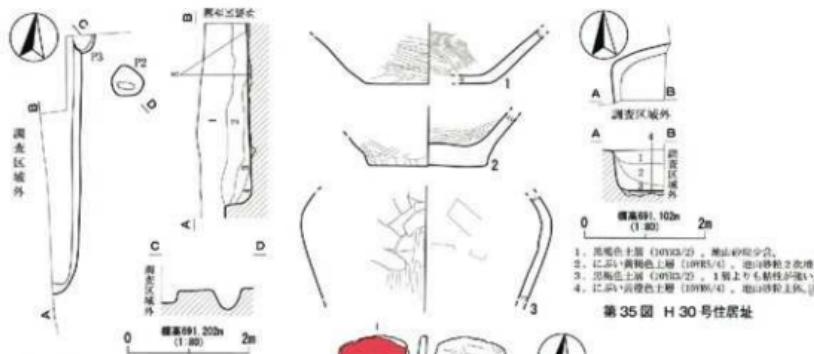
本址は弥生時代の所産であることは間違いないが、詳細な時期については不明である。



第32図 H 27号住居址

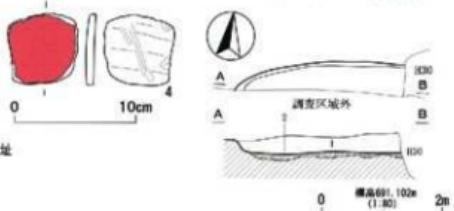


第33図 H 28号住居址



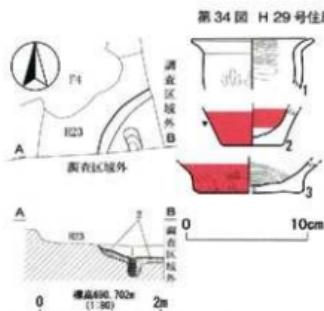
1. 黒褐色土層 (10103/2)。地山砂礫少含。
2. にふく黄褐色土層 (10105/4)。地山砂礫2次堆積。
3. 黒褐色土層 (10103/3)。地質上、地山砂含。
4. にふく黄褐色土層 (10106/4)。地山砂礫2次堆積。

第35図 H 30号住居址



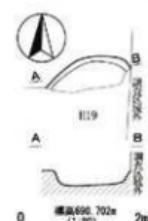
1. にふく黄褐色土層 (10106/4)。地山砂礫多含。
2. 黒褐色土層 (10105/4)。ムーム、地山砂礫の2次堆積。

第36図 H 31号住居址



1. 黒褐色土層 (10103/2)。研磨状穴、粘性。
2. にふく黄褐色土層 (10102/4)。地山砂礫主。

第34図 H 29号住居址

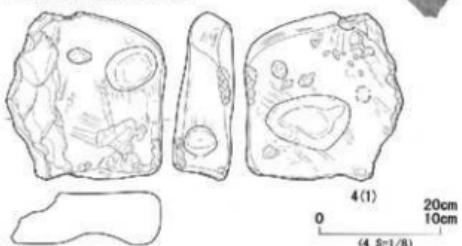
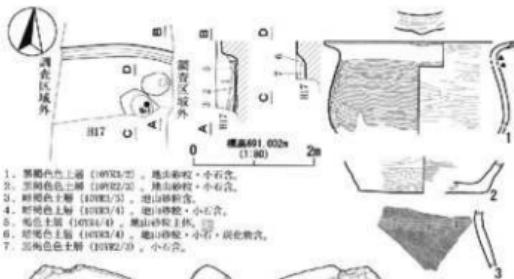


第37図 H 32号住居址

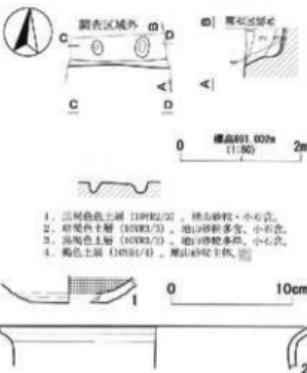


1. 黒褐色土層 (10102/2)。地山砂の2.小石含。
2. 黄褐色土層 (10103/3)。地山砂含。
3. 黑褐色土層 (10104/4)。地質上。
4. 黄褐色土層 (10104/4)。地山砂礫主。

第41図 H 36号住居址



第38図 H 33号住居址



第39図 H 34号住居址

○ H 30号住居址

本址はF 5グリットで検出された。H 31号住居址を切って構築されている。壁残高65cm以外の形態・規模は不明である。また、調査範囲の床面からは、主柱・炉址・周溝等は検出されていない。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

○ H 31号住居址

本址はF 5グリットで検出された。H 30号住居址を切られる。壁残高20cm以外の形態・規模は不明である。また、調査範囲の床面からは、主柱・炉址・周溝等は検出されていない。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

○ H 32号住居址

本址はF 5グリットで検出された。H 17号住居址・P 10に切られる。壁残高50cm以外の形態・規模は不明である。南壁下から検出されたPitからは、φ 20cmの柱が確認されており、棟持柱の可能性が強い。このPitは覆土上層から1の甕が出土している。その他に床面から検出された2基のPitの性格は不明である。また、掘方から1基のPitが検出されているが、これについても、その性格は不明である。主柱・炉址・周溝等は調査範囲からは検出されていない。なお、本址の床面は他の住居に比べ、極めて堅硬であった。

出土遺物としては、弥生土器と石器が存在する。弥生土器には甕・壺が認められる。甕は頭部に横描縦状文を巡らし、口縁部と体部には横描波状文が施されている。壺は赤彩が施されず、頭部に横描の「T」字文が巡るようである。石器は3の磨石が出土している。全面に赤色顔料が付着しており、赤色顔料を細かく磨り潰すのに使用されていたようである。

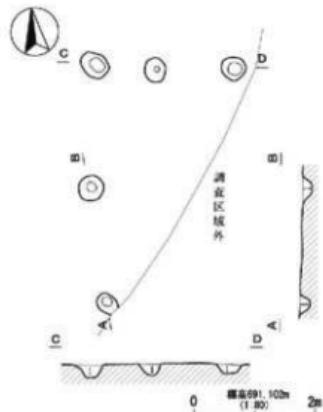
以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期後半箱清水期の所産と思われる。

○ H 33号住居址

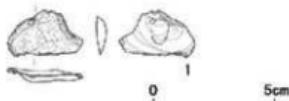
本址はA 4グリットで検出された。H 17号住居址に切られる。壁残高22cmの他は形態・規模等は不明である。床面上から検出された2基のPitの性格は不明である。調査範囲の壁下には周溝が確認された。主柱・炉址等は調査範囲には存在しなかった。

出土遺物には弥生土器・石器が認められる。弥生土器には甕と壺が認められる。甕1は口唇部に4ヶの突起を有し、口縁部と頭部には文様帶を有しない、体部には横位の横描波状文が施文され、これを1本の継ぎのヘタ描き波状文6本により器面を均等に6分割している。3の甕は頭部付近の破片である。頭部に横描縦状文、体部には横描斜走文が施文されている。2の壺は底部の破片であり、施文は、赤彩は認められない。石器は4の多凹石を利用した台石兼砥石が出土している。

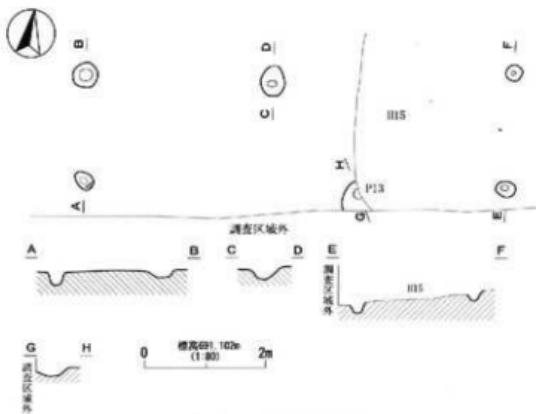
以上の出土遺物から、本址は弥生時代中期後半栗林期の所産と思われる。



1. 黄褐色土層 (10382/2)。バニス少含。



第42図 F1号掘立柱建物址



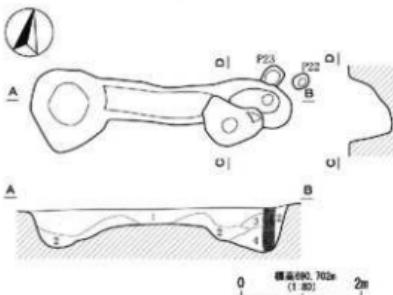
第43図 F2号掘立柱建物址

○H 34号住居址

本址はA4グリッドで検出された。調査範囲内においては他遺構との重複関係は認められない。壁残高46cmの他は形態・規模等は不明である。床面上から検出された2基のPitの性格は不明である。主柱・カマド・周溝等も調査範囲内には存在しない。

出土遺物には土師器が認められる。1は底部手持ちヘラケズリ調整が施される内黒の壺、2は「コ」字口縁を呈する武藏窓の口縁部である。

以上の遺物から本址は平安時代9世紀前半の年代が比定される。



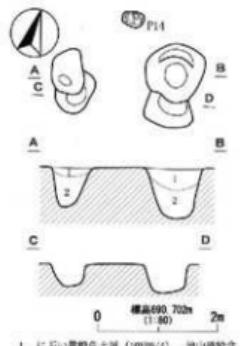
1. 黄褐色土層 (10384/1)。地山砂含。

2. にぶい黄褐色土層 (10385/3)。地山砂含。

3. にぶい黄褐色土層 (10385/3)。地山砂含ブロック含。

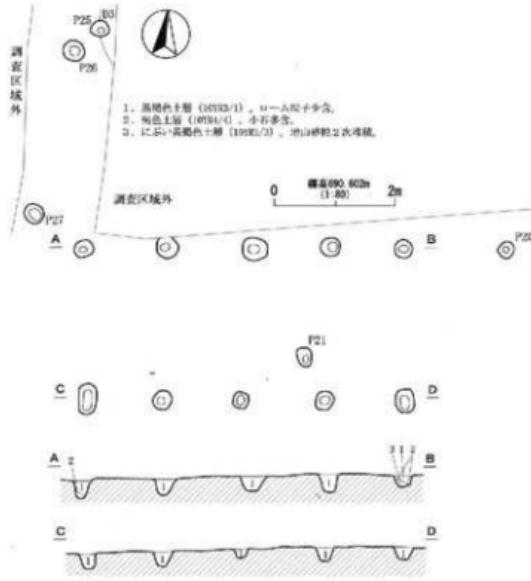
4. にぶい黄褐色土層 (10387/4)。地山砂含2次堆積。

第45図 F4号掘立柱建物址



1. にぶい黄褐色土層 (10386/1)。地山砂含。
2. にぶい黄褐色土層 (10387/4)。地山砂含多含。

第46図 F5号掘立柱建物址



第44図 F3号掘立柱建物址

第2節 掘立柱建物址

○F 1号掘立柱建物址

本址は16グリットで検出された。H9・H10号住居址を切って構築されている。南北一2間、東西一2間の計5基のPitが検出されたが全容は不明である。Pitは円形を呈し、径40cm前後、深度は20cm前後であるが、柱は確認出来なかつた。出土遺物は皆無であり、時期は不明であるが、少なくとも、弥生時代後期前半吉田期以降の所産ではある。

○F 2号掘立柱建物址

本址はE7グリットで検出された。H15号住居址に切られる。南北一1間、東西一2間の計5基のPitが検出されたが全容は不明である。Pitは円形を呈し、径30～50cm前後、深度は20cm前後であるが、柱は確認出来なかつた。出土遺物は皆無であり、時期は不明であるが、奈良時代以前の所産である。

○F 3号掘立柱建物址

本址はC11グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-94°-Wに長軸方位をとる。南北一4間、東西一1間の柱間式の形態である。柱間は南北一2.5m、東西一1.1～1.4mである。柱そのものは確認できなかつた。Pitは橢丸方形の平面形を呈し、径25～50cm、深度15～30cmである。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

○F 4号掘立柱建物址

本址はD12グリットで検出された。H22・H23号住居址を切って構築されている。Pit 2基を溝で連結した一对のPitが検出されたにすぎない。調査区の南側に展開するもと思われる。長径4.3m、深度は最深部で74cmを測る。柱

○H 35号住居址

本址はC8グリットで検出された。H19号住居址に切られる。壁残高18cm以外の形態・規模は不明である。また、調査範囲の床面からは、主柱・炉址・周溝等は検出されていない。

出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。

○H 36号住居址

本址はD12グリットで検出された。H32号住居址に切られる。壁残高5cm以外の形態・規模は不明である。また、調査範囲の床面からは、主柱・炉址・周溝等は検出されていない。

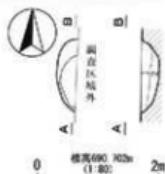
出土遺物は土師器と弥生土器が認められる。1は土師器の壺である。内面ヘラミガキ、外側ヘラナデ調整が施される。2は弥生土器の鉢である。内外面に赤彩が施されるが、内面の底部付近は器皿が剥落している。3は弥生土器の壺である。外側には赤彩が施されるが、残存部分に施文は認められない。以上の状況から、本址の年代は確定できず、不明である。

はφ 18 cmである。出土遺物は皆無であり、時期は不明であるが、弥生時代中期後半至林期以降の所産ではある。

○ F 5号掘立柱建物址

本址はB12グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。建替が認められるPitが2基が検出された。調査区の南西方向に展開しているものと思われる。Pitの平面形は円形であり、径70~100cm、深度35~50cmの規模であるが、柱は確認できなかった。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

第3節 土坑



1. 棕褐色土層 (1033/3) バイオ少。
2. 黒褐色土層 (1033/2) バイオ少。

第47図 D 3号土坑

○ D 3号土坑

本址はB10グリットで検出された。H19号住居址を切る。調査区域外にのびるため、全容は不明であるが、径12m程の円形の平面プランを呈するものと思われる。深度は30cmの規模を有し、断面は鍋底状の形態である。出土遺物は皆無であり、時期は不明であるが、古墳時代中期（5世紀）以降の所産である。

第4節 溝址

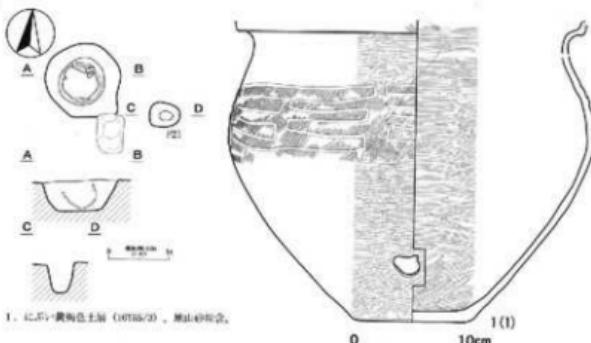
○ M 1号溝址

本址はC11グリットで検出された。東西方向に緩やかに湾曲して構築されている。F 3号掘立柱建物址に伴う可能性も否定できない。幅は30cm前後で比較的安定しているが、深度は東端では15cm程であるが、西に向かい深さを増し西端では35cmに達している。自然が形成したものではなく、明らかに人为的に掘削された溝であるが、水路ではなく、区画を目的としたものと思われる。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

第5節 ピット

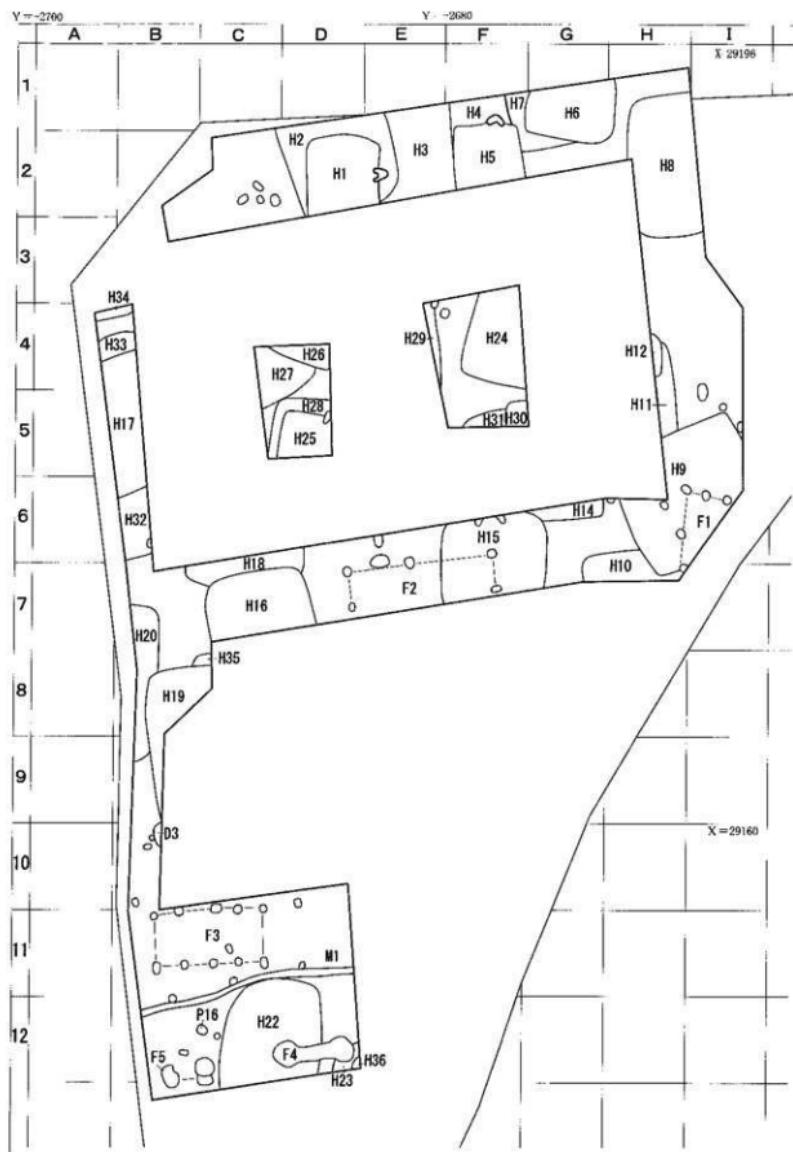
○ P 16

本址はC12グリットで検出された。平面形状は径120cmの円形。断面は深度50cmの逆梯形を呈する。内部には1の土器が正位に埋設されていた。土器内には何も内包されていなかった。土器の文様の特徴から、本址は弥生時代中期後半至林期の所産であると思われる。本址の性格は不明である。



第48図 M 1号溝址

第49図 P 16



第50図 西一本柳遺跡の全体図

第Ⅲ章 まとめ

今回の調査においては、弥生時代中期後半・後期前半・後期後半、古墳時代中期・後期、奈良時代・平安時代の住居址と、時期不明の住居址、掘立柱建物址、土坑、溝址、Pit等が検出された。通常の遺跡からは考えられない、異常とも言える遺構密度と出土遺物量である。しかも、その質も高い。佐久市と言ふよりは、千曲川上流域の弥生文化を解明するために必要不可欠な重要遺跡であることが、西一本柳遺跡の調査が重ねられる度に、より鮮明になってきた。

さて、第13次の調査の最大の成果は弥生時代後期前半「吉田式」期の住居が4軒検出され、概期の遺物一特に土器群の資料が蓄積出来たことである。1990年代の大規模開発に伴う調査により、佐久市では、中期後半「栗林式」期の資料は飛躍的に増大し、その研究もいくばくかの進展をみたが、後期前半の資料については、当遺跡の第3・4次調査において、その断片が明らかとなった他は、概期遺構のまとまった発見はなく、研究は停滞している。しかし、今回の調査においては、中期後半～後期後半までの住居が検出され、西一本柳遺跡が「栗林式」以降、連続と安定して営まれた大集落であることが再確認された。なお、検出遺構の時期についてには、以下の表にまとめてある。

最後に、公の開発の場合は良いが、民間開発の場合には調査費負担の問題等から、調査せず、盜土保存になる場合や、最悪の場合、遺跡の保護・保存に関して協力を得られない事もある状況下で、今回は油井 基氏の御理解により、多くの成果を上げる調査が行えたことについて感謝したい。

弥生時代		古墳時代		奈良時代	平安時代	不明
中期後半（栗林）	後期前半（吉田）	後期後半（箱溝水）	中期（5C）			
H 3	H 8	H 2	H17	H 1	H 5	H34
H 4	H 9	H 6	H19	H25	H15	H10
H 7	H24	H14				H11
H16	H26	H32				H12
H18						H29
H20						H30
H22						H31
H23						H35
H27						H36
H28						F 1
H32						F 2
H33						F 3
P16						F 4
						F 5
						D 3
						M 1

遺物名	No.	器種	形	口径(外)	底径(内)	高さ(厚)	重さ(g)	量	備考	出土場所
H1	1	灰土器	杯	(12.7) -(14.0)	(10.5) (11.4)	4.8 (19.0)	ヘラミガキ→黒色刷毛 頭部ヘラケアリ、比較	ヘラミガキ→ヘラミガキ ヘラミガキ	中空尖頭 回空尖頭、No.2 回空尖頭	口X1個 口X3個 口X1個
	2	灰土器	碗	-	-	-	-	-	-	-
	3	灰土器	碗	-	-	-	-	-	-	-
4	陶器	杯	-	-	(5.3)	-	-	-	-	-
5	陶器	盆	-	(8.1)	-	-	-	-	-	-
6	陶器	盆	-	(8.1)	-	-	-	-	-	-
7	陶器	盆	(14.6)	7.9	(20.2)	-	-	-	-	-
8	陶器	蓋?	-	-	-	-	-	-	-	-
9	6件	灰土器	盆	(13.0)	7.3	(6.7)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	中空尖頭 回空尖頭、No.1 元空尖頭	口X2個 口X2個 口X2個
H2	1	灰土器	盆	(17.5)	-	-	ヘラミガキ→小形 ヘラミガキ→小形	ヘラミガキ→小形 ヘラミガキ	中空尖頭 元空尖頭	口X1個 H1P1 NPF16
2	灰土器	盆	-	-	-	-	-	-	-	-
3	灰土器	碗	-	-	-	-	-	-	-	-
4	灰土器	盤	(18.6)	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	中空尖頭	NPF24
5	灰土器	盤	-	6.4	-	-	-	-	-	-
6	灰土器	盤	(16.5)	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	中空尖頭 回空尖頭、No.2	口X2個 NPF12
7	灰土器	盤	-	7.6	-	-	ヘラミガキ→小形 ヘラミガキ→小形	ヘラミガキ→小形 ヘラミガキ→小形	中空尖頭 元空尖頭	ケン ケン
8	灰土器	碗	-	-	9.6	-	ヘラミガキ、削輪	ヘラミガキ、削輪	元空尖頭	NPF24 P6ケン H3.11ケン
H3	1	灰土器	盤	(24.1)	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	中空尖頭	-
2	灰土器	盤	-	14.2	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	中空尖頭 回空尖頭、No.1	P2 NPF14
3	灰土器	盤	-	-	6.2	-	口縁×底部ヘラミガキ(切) 底部ハコ	口縁×底部ヘラミガキ(切) 底部ハコ	中空尖頭 元空尖頭、No.1	-
4	灰土器	盤	-	-	(8.2)	-	-	-	-	-
5	灰土器	盤	-	-	-	-	-	-	-	-
6	石器	盤	-	-	-	-	-	-	-	-
7	石器	不明	-	-	-	-	-	-	-	-
H5	1	灰土器	碗	-	3.6	2.5	0.35	5.5	-	口X2個 口X2個
2	灰土器	碗?	-	(12.8)	6.6	-	-	-	-	-

遺物名	No.	器種	器形	量		成形・調理		備考		出土地點	
				口径(外)	底径(内)	高さ(外)	高さ(内)	重量(g)	重さ(g)		
H5	3	猪頭器	14?			10.2	6.0	7.4	ヘラケスリ、ナチ	1回火焼、1・2回火焼?	1区トレ
	4	十輪器				(24.0)			ヘラケスリ	ハケ口、溶接、No.1	カマツ
	5	輪頭器	武藏燒			(24.0)			ヘラケスリ、ナチ	ハケ口、溶接	田原
	6	輪頭器	武藏燒			(25.4)			ヘラケスリ	溶接、No.1	1区カヤツ
	7	輪頭器	云海燒						ヘラケスリ、ナチ	溶接、No.1	カマツ
	8	輪頭器	武藏燒						ヘラケスリ	溶接、No.1	1区トレ
	9	輪頭器	夷?						ヘラケスリ	溶接、No.1	1区トレ
10	漆器	長柄匙				5.2			ハケ口、平面焼き目	1回火焼、No.2、3、4、5	IV区14
	11	漆器	短匙			4.7			ハケ口、平面焼き目	カマツ	IV区14
	12	漆器	漆			10.3			ハケ口、平面焼き目	溶接、No.1	IV区14
	13	漆器	漆			14.3			ハケ口、平面焼き目	溶接、No.2	IV区14
	14	漆器	漆						ハケ口、平面焼き目	溶接、No.3	IV区14
H6	1	漆器	漆			(2.4)	漆太陽		ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区14
	2	漆器	漆			(11.4)			ヘラミガキ→赤彩	光合焼	1区14
	3	漆器	漆				漆太陽		ヘラミガキ→赤彩	光合焼	1区14
	4	漆器	漆						ヘラミガキ→赤彩	光合焼	1区14
	5	漆生土器	漆			(21.6)			ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	6	漆生土器	漆				漆太陽		ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	7	漆生土器	漆						ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	8	漆生土器	漆			(15.6)			ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	9	漆生土器	漆				漆太陽		ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	10	漆生土器	漆						ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	11	漆生土器	漆						ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	12	漆生土器	漆						ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
	13	漆生土器	漆						ヘラミガキ→赤彩	1回火焼、No.2	1区34
H7	1	漆生土器	漆				漆太陽		1回火焼、漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	2	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	3	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	5	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	6	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	7	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	8	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	9	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	10	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	11	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	12	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	13	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
H8	1	漆生土器	漆				漆太陽		1回火焼、漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	2	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	3	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	4	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	5	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	6	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	7	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	8	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	9	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	10	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	11	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	12	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区
	13	漆生土器	漆						漆頭輪状	1回火焼、漆頭輪状	1区

第2表 出土遺物一覧表2(H5-6-7-8)

遺物名	No.	器種	器形	口径(外)	底径(内)	高さ(外)	外観		出土地点
							内	外	
HS	4	弥生土器	鉢	23.2			ヘラミガキ→湯形	回転式開口	Ⅱ区
	5	弥生土器	鉢	27.6			ヘラミガキ→水形	回転式開口	Ⅳ区 11.9 区
	6	弥生土器	鉢	6.3			ヘラミガキ→水形	回転式開口	1区
	7	弥生土器	鉢	19.7	11.1	16.8	ヘラミガキ→水形 脚部へハナデ	回転式開口、No.12	Ⅱ区 1区
	8	弥生土器	盆	14.4			ヘラミガキ→水形	完全式開口	Ⅲ区 1区
	9	弥生土器	盆				ヘラミガキ→水形	完全式開口	Ⅲ区
	10	弥生土器	盆	11.2			ヘラミガキ	完全式開口	Ⅰ区 トレ Ⅳ区
	11	弥生土器	甌	(11.2)			輪廓線状文 (10.6)	完全式開口	Ⅲ区 トレ
	12	弥生土器	甌	(11.6)			輪廓線状文 (7.4)	完全式開口	Ⅲ区 トレ
	13	弥生土器	甌	(13.0)			ヘラミガキ	輪廓線状文 (2.6)	Ⅲ区 トレ
	14	弥生土器	甌	13.5	6.6	11.1	ヘラミガキ	輪廓線状文 (3.6×4.6)	Ⅲ区 トレ
	15	弥生土器	甌				ヘラミガキ	輪廓線状文 (8.4)	Ⅲ区 トレ
	16	弥生土器	甌	(14.4)			ヘラミガキ	輪廓線状文 (11.木2.泡1)	完全式開口
	17	弥生土器	甌	16.4	6.9	21.3	ヘラミガキ	輪廓線状文 (9.木2.泡1)	完全式開口
	18	弥生土器	甌	(17.0)			ヘラミガキ	輪廓線状文 (10.木2.泡1)	完全式開口
	19	弥生土器	甌	19.8	7.8	31.8	ヘラミガキ	輪廓線状文 (8.木2.泡1)	完全式開口、No.6 Ⅲ区 トレ
	20	弥生土器	甌	(23.0)			ヘラミガキ	輪廓線状文 (7.木2.泡1)	完全式開口
	21	弥生土器	甌	25.2			ヘラミガキ	輪廓線状文 (5.木2.泡1)	完全式開口
	22	弥生土器	甌				ヘラミガキ	輪廓線状文 (7.木1.泡1)	完全式開口
	23	弥生土器	甌				ナラ	輪廓線状文 (7.木1.泡1)	完全式開口
	24	弥生土器	甌				ヘラミガキ	輪廓線状文	回転式開口
	25	弥生土器	甌				ナラ	ナラ	Ⅲ区 トレ
	26	弥生土器	甌				ナラ	ナラ	Ⅲ区 トレ
	27	弥生土器	甌				ヘラミガキ	輪廓線状文 (4木×2回)	完全式開口
	28	弥生土器	甌				ヘラミガキ	ヘラミガキ→泡水形 口輪・輪廓線状文	完全式開口

第3表 出土遺物一覧表3(H8)

遺物名	No.	器種	器形	口径(径) (19.6)	底径(幅) (20.5)	高さ(厚)	重量(g)	成形法	調査者	備考	出土地点
H8	29	弥生土器	壺					ハラミガキ→小形 ハラミガキ→小形	回転式削 回転式削		II区
	30	弥生土器	壺					「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩、 「頭部」～腹部「ハラミガキ」～赤彩、 「頭部」～腹部「ハラミガキ」～赤彩	完全火照、No.2	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩、 「頭部」～腹部「ハラミガキ」～赤彩	I区・I四 I区・I四
	31	弥生土器	壺		23.6			ハケ口 ハラミガキ	回転式削		III区・IV区
	32	弥生土器	壺		24.4			ハラミガキ→小形	回転式削		II区
	33	弥生土器	壺		11.8			ハラミガキ→赤彩 「頭部」～赤彩	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	I区・I四 III区・IV区
	34	弥生土器	壺					ハラミガキ→赤彩 「頭部」～赤彩	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	I区・I四 III区・IV区
	35	弥生土器	壺					剥落	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	I区
	36	弥生土器	壺	3.8	3.8	0.65	11.3	ハラミガキ	回転式削、No.11	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩 「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	III区・I四
	37	土製器	土製壺	3.8	3.5	0.65	8.8	ハラミガキ	止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	I区
	38	石器	石刀	4.0	2.5	最大幅3.5	11.3	「頭部」～赤彩 「頭部」～赤彩	止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	II区
	39	石器	石刀	(2.9)	(2.9)	(0.2)	(2.0)		止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	II区
	40	石器	石刀	(3.3)	(2.2)	(0.15)	(1.9)		止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	II区
	41	石器	石刀	(4.5)	(2.3)	(0.2)	(2.6)		止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	II区
	42	石器	石刀	(4.1)	(6.0)	(1.4)	(34.7)		止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	II区
	43	石器	石刀	4.5	3.7	0.8	15.6		止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	II区
	44	石器	石刀	9.1	3.6	3.0	132.9		止水用付口、引径0.25	止水用付口、引径0.25	II区
H9	1	弥生土器	碗					ハラミガキ(裏)→小形	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・I四
	2	弥生土器	碗					ハラミガキ(裏)→小形	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	3	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	4	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	5	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	6	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	7	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	8	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	9	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	10	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	11	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区
	12	弥生土器	碗					ハラミガキ	回転式削	「眼」～頭部「ハラミガキ」～赤彩	II区・IV区

遺構名	No.	器種	形	口径(径)	底径(底)	高さ(厚)	蓋	内面	外	備考	出土部位
H10	13	石器	穿孔石器	最大径 周(1.8) 底(1.8)	底(1.8) 周(1.8)	(0.25)	(2.3)			下部火口、孔径0.2	
14	7石器	擦擦石		10.4	5.0	2.7	244			全表面滑、下端微打削、No.4	Ⅲ区
15	6石器	擦擦石		10.8	7.8	0.6	660			全表面滑、No.3	Ⅲ区
16	7石器	擦擦石		12.4	7.4	4.2	510			全表面滑、「擦擦」字記入、No.2	Ⅲ区
17	1石器	多孔石		15.2	17.4	11.2	3340			指摘毛化焼、下端微打削、No.2	Ⅲ区
										側面3.2～7.7mm(0.6～0.3)傾 側面4.1～7.7mm(3.3～2.8)傾3.2 ～1.0深0.7～0.2)、No.5	Ⅲ区
18	7石器	不明		2.5	1.6	0.25	1.0			下部火口	Ⅰ区
19	1石器	不明		3.3	2.7	0.45	5.5			下部火口	Ⅰ区
20	7石器	不明		4.0	1.9	0.7	7.5			下部火口	Ⅰ区
21	7石器	不明		5.5	1.5	0.5	4.6			正背面直角、逆刃二字、要身長4.2	Ⅳ区
										カクラン	
H10	1	骨製器	骨器							回旋火口、底部火口	
2	骨生火器	骨									
H11	1	石器	打製(斧?)	最大直径 周(8.4)	最大周 径(4.8)	最大厚 度(0.7)	38.2			正面直角、斜面直角、底部火口	
H14	1	弾子器	球	(13.4)						回旋火口	
2	弾子器	球		(15.8)	5.2	(5.75)				正面直角	
3	弾子器	球		(12.5)						正面直角	
4	弾子器	球		20.7	8.0	29.2				正面直角	Ⅳ区
5	弾子器	球								正面直角	Ⅳ区
H15	1	骨器	环	(13.7)	6.8					正面直角	Ⅳ区
2	骨器	环		(14.2)	(12.6)	(2.9)				正面直角	Ⅳ区
3	1骨器	环		(16.4)	(9.8)					正面直角	Ⅳ区
4	1骨器	环		(16.4)	(9.8)					正面直角	Ⅳ区
5	1骨器	环		(17.2)						正面直角	Ⅳ区
6	1骨器	环		(13.9)						正面直角	Ⅳ区
7	1骨器	环		(14.0)						正面直角	Ⅳ区
8	骨器	环		16.5	9.6	4.8				正面直角	Ⅳ区
9	1骨器	骨球状		(20.6)						正面直角	Ⅳ区
10	1骨器	骨球状		(21.8)						正面直角	Ⅳ区
11	1骨器	骨球状		(22.8)						正面直角	Ⅳ区
12	1骨器	骨球状		(23.6)						正面直角	Ⅳ区
13	1骨器	骨球状		(24.2)						正面直角	Ⅳ区

第5章 出土遺物一覧表5(H9-10-1・14-15)

遺物名	No.	器種	形	口径(内)	底径(外)	高さ(厚)	重量(g)	内	外	備考	出土地点
H15	14	土師器	素燒灰	(5.2)				ナテ	ヘラケズリ		1区トレ 山辺より カマド
	15	土師器	武藏燒	(7.4)				ナテ	ヘラケズリ		1区トリ 山辺より カマド
	16	土器	武藏燒	(10.2)	底小径 5.7	1.7		ナテ	ヘラケズリ		1区トリ 山辺より カマド
	17	土師器	土國門型	(2.0)				ナテ	ヘラケズリ	回転式開口 完全火照、丁度火候を上利用	1区・N区 山辺より カマド
	18	瓦山器	鉢	底大5				ナテ	ヘラケズリ	完全火照、下端部が火付焼	1区・N区 山辺より カマド
	19	石器	櫻石	(2.0)	底大4.5			ナテ	ヘラケズリ	全体に熱くされている 火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	20	石器	鈎表石瓶	(3.1)	底大4.0	(1.4)		ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	21	石器	磨石研石	(2.0)	底大3.5	(1.9)		ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	22	石器	磨物石	(2.0)	底大3.0	(1.4)		ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	23	石器	磨物石	(2.0)	底大2.5	(1.4)		ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	24	石器	磨物石	(2.0)	底大2.0	(1.4)		ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	25	石器	磨物石	(2.0)	底大1.5	(1.4)		ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	26	石器	刀子	(2.0)	底大1.0	(0.9)	0.5	ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
	27	铁製器	不知	(2.0)	底大0.95	(0.9)	0.2	ナテ	ヘラケズリ	火照部火照、輪孔丸焼	1区・N区 山辺より カマド
H16	1	家生土器	泡吹	(16.0)				ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩	No.1	1区・N区 山辺より カマド
	2	家生土器	泡吹	(18.6)				ヘラミガキ→赤彩	ヘラミガキ→赤彩	No.19	1区・N区 山辺より カマド
	3	家生土器	泡吹	(9.0)				ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	4	家生土器	泡吹	(15.8)				ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	5	家生土器	泡吹	(21.8)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	6	家生土器	台付瓶	(4.8)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	7	家生土器	泡吹	(8.2)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	8	家生土器	台付瓶	(10.8)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	9	家生土器	泡吹	(10.8)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	10	家生土器	泡吹	(11.3)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	11	家生土器	泡吹	(12.6)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	12	家生土器	泡吹	(14.6)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	13	家生土器	泡吹	(14.9)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	14	家生土器	泡吹	(11.3)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	15	家生土器	泡吹	(12.6)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	16	家生土器	泡吹	(14.6)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド
	17	家生土器	泡吹	(14.9)				ナテ	ヘラミガキ	完全火照、No.15	1区・N区 山辺より カマド

第6表 出土遺物一覧表(1-15-1-6)

通鑑名	No	説文	訛形	口経(俗)	音義(俗)	音義(本)	成 用・用 量		出典類似
							内	外	
H16	18	弟生十器	董	(16.4)	35.4	ナケ日→ヘラミガキ→ホ彩	ナケ日→ヘラミガキ→ホ彩	回文文庫	M文モリ
	19	弟生十器	董	17.7	9.0	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	元全文庫、No.9.10	II区1面
	20	弟生十器	董	(18.6)	-	-	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	回文文庫	II区2面
	21	弟生十器	董	19.8	-	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	元全文庫、No.14	1区1面
	22	弟生十器	董	21.1	-	ハクナチ→ヘラミガキ	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	元全文庫、No.20	II区2面
	23	弟生十器	董	-	10.4	ハケ日→部多引ニホ彩	ハクナチ→部多引ニホ彩	元全文庫、No.6	II区1.2面
	24	弟生十器	董	(10.8)	-	ハケナチ	ハクナチ→部多引ニホ彩	回文文庫	M文モリ
	25	弟生十器	董	(11.6)	-	ハクナチ	ハクナチ→部多引ニホ彩	回文文庫	II区2面
	26	弟生十器	董	(13.8)	-	ハラミガキ	ハラミガキ→部多引ニホ彩	回文文庫	1区1面
	27	弟生十器	董	(15.6)	-	ハケ日	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	「傳」文庫、No.11	II区1面
	28	弟生十器	董	-	-	ハケ日→ヘラミガキ	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	完全文庫、No.4	II区1面
	29	弟生十器	董	-	-	ハケナチ	ハケナチ→ヘラミガキ	回文文庫	II区2面
	30	弟生十器	董	-	-	ハラミガキ	ハラミガキ→ヘラミガキ	回文文庫	1区1面
	31	弟生十器	董	-	-	ハケ日	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	元全文庫、No.5	II区2面
	32	弟生十器	董	-	-	ハラミガキ	ハラミガキ→ヘラミガキ	回文文庫	II区2面
	33	弟生十器	董	-	-	ハケ日→ヘラミガキ	ハケ日→ヘラミガキ→ホ彩	回文文庫	II区1面
	34	弟生十器	董	15.6	4.5	7.2	ハラミガキ	ハラミガキ→ヘラミガキ	「傳」文庫
	35	石器	鑿	扇製石器	扇人軒	扇人軒	ハラミガキ→ヘラミガキ	「傳」文庫	II区2面
	36	石器	鑿	(4.0)	(1.9)	(0.23)	ナデ	ナデ、火付管	元全文庫
	37	石器	鑿	(3.5)	(1.3)	(0.23)	ナデ	ナデ、火付管	元全文庫
	38	石器	鑿	(1.4)	(2.1)	(0.25)	ナデ	ナデ、火付管	元全文庫
	39	石器	鑿	4.3	1.0	0.7	ナデ	ナデ、火付管	元全文庫
	40	石器	鑿	6.35	3.5	1.5	ナデ	ナデ、火付管	元全文庫
	41	石器	鑿	9.7	6.4	2.35	ナデ	ナデ、火付管	元全文庫
	42	石器	鑿	10.1	11.6	4.3	ナデ	ナデ、火付管	元全文庫
H17	1	土物器	壺	2.75	4.4	0.55	7.9	ナデ	「下」からくるお嬢
	2	土物器	壺	(15.8)	(1.76)	(14.3)	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	3	土物器	壺	(19.1)	(1.91)	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	4	土物器	壺	(19.3)	-	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	5	土物器	壺	(20.5)	(22.0)	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	6	土物器	壺	-	-	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	7	土物器	壺	-	-	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	8	土物器	壺	-	-	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	9	土物器	壺	-	-	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫
	10	土物器	壺	-	(17.0)	-	ナデ	ナデ、火付管	「傳」文庫

遺跡名	No.	器種	形態	口径(径) (幅)	底径(幅) (幅)	高さ(高) (高)	重量(g) (重)	内 容	外 形	備 考		付子部位
								ナ	テ	ナ	テ	
H17	11	陶器	甕	(24.6)				ラミガキ	ハゲ目、ヘラケズリ	完全火照、瓦礫圓の火照	1層	
	12	土器	甕	(28.6)		(7.8)		ハチ目		既全火照、瓦礫圓の火照	H17.9あり	
	13	土器	甕					ハチ目		既全火照	チ	
	14	土器	甕		(9.0)			ヘラミガキ		既全火照	チ	
	15	土器	甕					ヘラミガキ		既全火照	チ	
	16	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	既全火照	チ	
	17	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	既全火照	チ	
	18	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	既全火照	チ	
	19	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	既全火照	チ	
	20	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	既全火照	チ	
	21	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	既全火照、既全火照	P1	
	22	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照、既全火照	H32P1	
				(13.1)								
	23	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照	1層	
	24	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照		
	25	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照		
	26	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照		
	27	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照		
H18	1	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照		
	2	土器	甕					ヘラミガキ	ヘラミガキ	既全火照		
			台付甕			15.7						
	3	土器	甕									
	4	土器	甕									
	5	土器	甕									
	6	土器	甕									
	7	土器	甕									
	8	土器	甕									
	9	土器	甕									
	10	石器	研石									
	11	石器	研石									
	12	土器	甕									
	13	土器	甕									
	14	土器	甕									
H19	1	土器	甕									
	2	土器	甕									
	3	土器	甕									
	4	土器	甕									

遺物名	No.	器種	形	寸法(径)	底径(高)	高さ(厚)	内面	外	裏	備考	出土場所
H19	5	弥生土器	甌				ヘラミガキ→赤彩			完全火照	私室
6	弥生土器	盆					「口」字彌文、口縁彌文、ヘラミガキ→赤彩 輪文(2本)、輪縁彌文	完全火照、私室			
7	十文字器	臼口					ヘラミガキ	破片火照、赤彩(2本)	破片火照、赤木		
8	十文字器	臼口		(10.4)	(5.1)	(4.4)	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔2.3mm	完全火照		
9	弥生土器	盆		(20.8)	(7.6)	(7.8)	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔2.3mm	完全火照	試掘	
10	弥生土器	盆		(19.6)	(13.2)	(11.2)	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔2.3mm	完全火照	P 1	
11	弥生土器	甌					「口」字彌文、ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照		
12	弥生土器	甌					「口」字彌文、ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照		
13	弥生土器	甌					「口」字彌文、ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照		
14	弥生土器	甌					「口」字彌文、ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照		
15	弥生土器	甌					「口」字彌文、ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照		
16	弥生土器	甌					「口」字彌文、ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照		
17	白器	陶製石瓶		1.4	1.6	0.25	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	1 段	
18	白器	陶製石瓶		3.5	1.8	0.25	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	1 段	
19	白器	陶製石瓶		11.3	5.0	2.3	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	1 段	
2022	1	弥生土器	甌	16.1	4.8	6.7	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	試掘 H 1	
2	弥生土器	盆		(6.5)			ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	N/K	
3	弥生土器	盆					ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	ケン	
4	弥生土器	盆					ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	K・N/K	
5	弥生土器	甌		(10.8)			ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	P 1	
6	弥生土器	甌		13.7	7.0	15.8	ヘラミガキ→赤彩	完全火照、穿孔	完全火照	1 区 1 隅	

遺跡名	No.	器種	器形	口径(外)	底径(内)	残存高	底盤(有無)	所屬	内面	外側	備考	出土層位
II22	7	弦纹器	甌	(14.6)				ヘラミガキ(陶)				I区
8	弦纹器	甌		19.3				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、No.1	IV区 1層
9	弦纹器	甌		5.9				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、No.1	
10	弦纹器	甌		6.4				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	I区
11	弦纹器	甌		8.0				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	I区
12	弦纹器	竹叶甌		(5.8)				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	I区
13	弦纹器	竹叶甌		7.2				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、No.5, 8	II区
14	弦纹器	竹叶甌		(8.4)				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	III区 2層
15	弦纹器	甌						ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、竹木	IV区
16	弦纹器	甌						ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、竹木	I区
17	弦纹器	甌						ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、竹木	III区
18	弦纹器	甌		(14.8)				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	III区 2層
19	弦纹器	钵						ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	III区 2層
20	弦纹器	甌		8.2				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	III区 2層
21	弦纹器	甌		11.6				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、No.8	III区 2層
22	弦纹器	甌		(11.8)				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	III区
23	弦纹器	甌		13.2				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、No.3, 4	PI3.5層・I区
24	弦纹器	甌		(15.1)				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	
25	弦纹器	甌		(17.0)				ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	II区
26	弦纹器	甌						ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	IV区 2層
27	弦纹器	甌?						ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照	IV区 2層
28	弦纹器	甌						ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	ヘラミガキ(陶)	完全火照、No.6	IV区 2層

遺物名	No.	器種	器形	口径(外)	蓋径(内)	蓋厚(等)	内			外			考	図	出土地点
							横	縦	面	横	縦	面			
H22	29	弥生土器	壺				ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			後片尖削、柄木	Ⅳ	Ⅳ
30	弥生土器	壺					横腹山形文、ハケ口→ヘラミガキ			横腹山形文、ハケ口→ヘラミガキ			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
31	弥生土器	壺					ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
32	弥生土器	壺					ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
33	弥生土器	壺					ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			ハケ口→ヘラミガキ(鏡)			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
34	石器	打製石器		最大幅 (1.9) (3.8)	最大幅 (1.2) (1.3)	最大幅 (0.9) (0.2)				ハケ口→ヘラナデ			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
35	石器	磨製石器											後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
36	石器	スクレイバー?		3.7	5.5	1.3	30.6						後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
37	石器	スクレイバー?		4.3	3.6	1.1	13.8						後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
38	石器	磨・鉋	6.3	5.6	2.9	95.8							後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
39	石器	磨・鉋	8.1	7.7	3.4	27.5							後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
40	石器	不明	1.5	1.3	0.15	0.5							後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
41	石器	不明	2.9	1.0	0.4	1.6	ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
42	1 弐生土器	盆	(13.7)	(7.0)			ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
43	2 弐生土器	盆	(26.3)				ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
44	3 弐生土器	盆					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
45	4 弐生土器	盆					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
46	5 弐生土器	盆					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
H23	1	弥生土器	高环				ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
2	2 弐生土器	壺					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
3	3 弐生土器	壺					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
4	4 弐生土器	壺					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
5	5 弐生土器	壺					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
6	6 弐生土器	壺					ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
H24	1	弥生土器	高环				ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
2	2 弐生土器	壺		(15.0)			ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
3	3 弐生土器	壺		(18.8)			ハラミガキ→赤彩			ハラミガキ→赤彩			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
4	4 弐生土器	壺					ハラナデ			ハラナデ			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
5	5 弐生土器	壺					ハケ口、ナデ			ハケ口、ナデ			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
6	6 石器	磨製石器		扁人型 (2.3)	扁人型 (1.5)	扁人型 (0.25)	8.8			ハケ口、ナデ			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
7	7 石器	磨製石器		(3.1)	(2.2)	0.3	(2.0)			ハケ口、ナデ			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ
8	8 石器	磨・砥石		7.3	3.9	1.2	51.7			ハケ口、ナデ			後片尖削、柄木	Ⅴ	Ⅴ

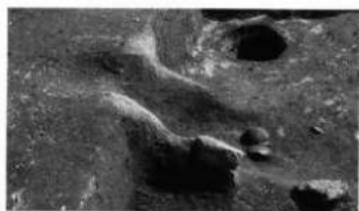
No.	遺物名	器種	形	口径(横) 縦(高)	底径(横)	内 部 寸 度	底 部 寸 度	量 量	重 量	備 考	出土層位
H24	9 瓶器	不明		3.7	2.7	0.5		3.8		全体擦り、上・下部削れ後削り成	II区1層
H25	1 釜	鉢	16	14.4	12.0	4.7				全体擦り→黑色透照	3層
	2 釜	鉢	—	(21.6)	10.0	(12.3)		ヘラミガキ→黒色透照	No.2	—	3層
	3 釜	鉢	—	(21.6)	—	—		ヘラミガキ→黒色透照	No.3	—	3層
	4 釜	鉢	—	(10.6)	—	—		ヘラミガキ→黒色透照	No.1	回転式鋸歯、	3層
	5 釜	鉢	—	(21.6)	7.0	(14.0)		ヘラミガキ→黒色透照	—	—	—
	6 釜	鉢	—	(17.2)	—	(29.45)		ヘラミガキ→黒色透照	—	完全透照	—
	7 釜	鉢	圓形	最大長9.2	深人厚8.0	8.0		ヘラミガキ→黒色透照	—	完全透照	—
	8 釜	鉢	深鉢形	(8.3)	(8.2)	(4.8)		ヘラミガキ→黒色透照	—	完全透照	—
	9 釜	鉢	圓形	13.7	8.6	5.2		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	3層
	10 釜	鉢	圓形	11.1	9.3	8.5		ヘラミガキ→赤彩	No.4	全体擦り、上・下端打抜	3層
	11 釜	鉢	不規	1.6	1.7	0.55		ヘラミガキ→赤彩	No.5	全体擦り、上・下端打抜	2層
H26	1 飴土器	鉢	—	(6.2)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	2 飴土器	鉢	—	(11.4)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	3 飴土器	鉢	—	(9.0)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
H27	1 飴土器	鉢	—	(6.6)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	2 飴土器	鉢	高环	(17.4)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	3 飴土器	鉢	高环	(19.0)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	4 飴土器	鉢	高环	(22.2)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	5 飴土器	鉢	高环	(24.0)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	6 飴土器	鉢	高环	(24.6)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	7 飴土器	鉢	高环	(12.2)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	9 飴土器	鉢	高环	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
H28	1 飴土器	鉢	—	(18.6)	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	2 飴土器	鉢	—	(17.5)	6.7	(18.0)		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	3 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	4 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	5 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	6 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	7 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	8 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	9 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5
	10 飴土器	鉢	—	—	—	—		ヘラミガキ→赤彩	—	全体擦り、上・下端打抜	試掘H 5

第12表 出土遺物一覧表1-2(H24-25-26-27-28)

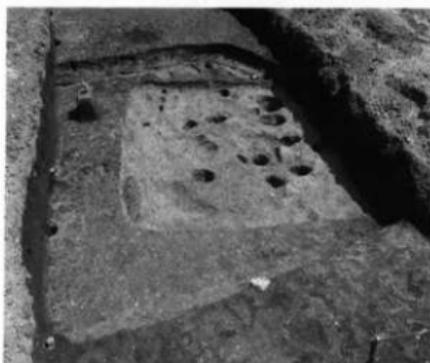
遺物名	No.	器種	形	口径(外)	底径(内)	高さ(厚)	成形・焼成			出土位置
							内	外	面	
H29	1	弥生土器	甕	(10.5)	9.8	—	ハケ口、ヘラミガキ	ヘラケシリ	回転火照	
	2	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ、ヘラミガキ	ヘラケシリ	完全火照	
	3	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ、ヘラミガキ	ヘラケシリ	完全火照	
	4	弥生土器	甕	最大幅5.8	—	0.7	ハケ口、ヘラミガキ	ヘラミガキ→ホタルヒ	完全火照	
H32	1	弥生土器	甕	最大幅5.8	15.1	4.9	ハケ口、ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全火照	No.1
	2	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全火照	2番
	3	台器	甕	最大幅7.8	最大幅7.5	5.7	467	ヘラチテ	完全火照	
	4	台器	甕	最大幅7.8	最大幅7.5	5.7	—	ヘラミガキ	完全火照	
H33	1	弥生土器	甕	15.6	(10.5)	—	ハケ口	ヘラミガキ	完全火照	
	2	弥生土器	甕	—	—	—	ハケ口	ヘラミガキ	完全火照	
	3	弥生土器	甕	—	—	—	ハケ口	ヘラミガキ	完全火照	
	4	台器	甕(陶石?)	最大幅27.6	最大幅26.1	9.5	9560	ヘラミガキ	完全火照	石本
	5	台器	甕	—	—	—	—	ヘラミガキ	完全火照	完全火照
H34	1	土陶器	甕	(25.8)	(6.2)	—	ヘラミガキ	ヘラケシリ	完全火照	
	2	土陶器	甕	(10.0)	—	—	ヘラミガキ	ヘラケシリ	完全火照	
H36	1	土陶器	甕	—	—	5.0	見込み焼成	ヘラミガキ→赤彩	完全火照	
	2	土陶器	甕	—	—	—	ハケ口	ヘラミガキ	完全火照	
	3	弥生土器	甕	—	(9.0)	—	ハケ口	ヘラミガキ	完全火照	

第13表 出土遺物一覧表1-3(H 29-32-33-34-36)

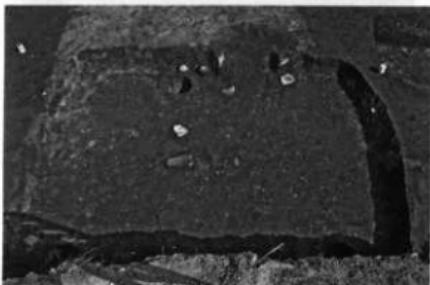
遺物名	No.	器種	形	口径(外)	底径(内)	高さ(厚)	成形・焼成			出土位置
							内	外	面	
F1	1	土器	甕	最大幅3.1	最大幅3.1	1.9	ハケ口	ヘラミガキ	11段焼	P.5
	2	土陶器	甕	—	—	—	—	—	—	正面部は他出直?
P16	1	弥生土器	甕	—	—	9.7	ヘラミガキ	ヘラケシリ	1段焼	1番
Z	1	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラケシリ	ドウ輪焼後穿孔(-fl.)	2



← II1 号住居址 ↑ II2 号住居址カマド
(西から) (北から)



← II2 号住居址 中央は II1 号住居址 (雁方) (西から)
↑ II3 号住居址 (南から)

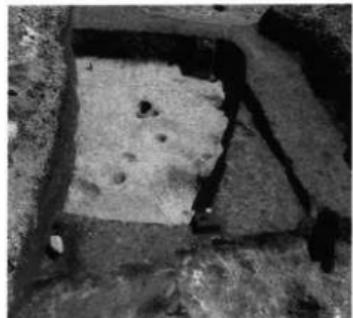


← II5 号住居址 (南から) ↑ II5 号住居址カマド (西から)

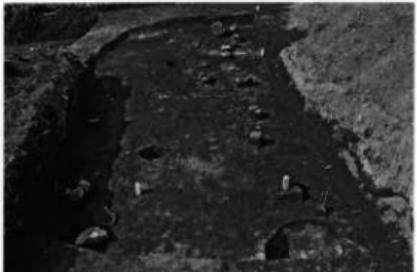


← II6 号住居址 (東から)





III-7号住居址（西から）



III-8号住居址（南から）



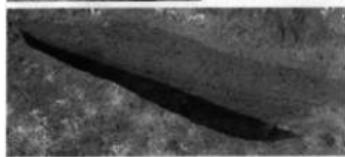
← III-10号住居址（東から）



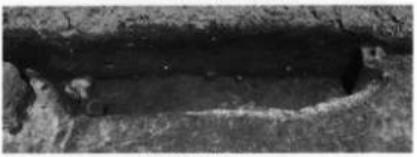
III-10号住居址（北から）



III-9号住居址（北から）



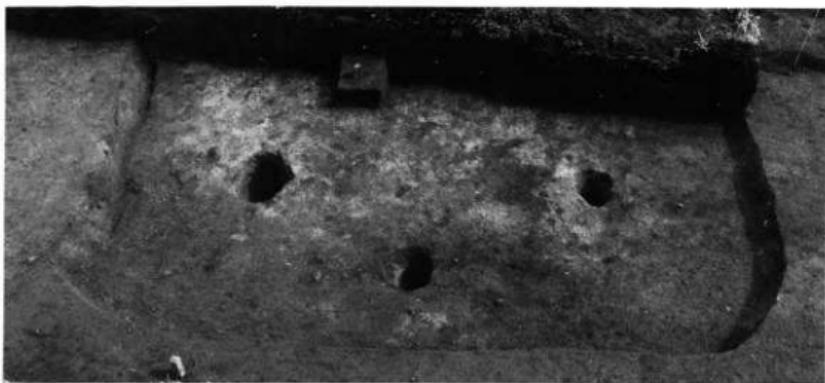
III-12号住居址（東から）



III-14号住居址（南から）



← III-15号住居址（東から）



H16号住居址（北から）



H16号住居址
遺物出土状況
—全體（西から）
↓部分





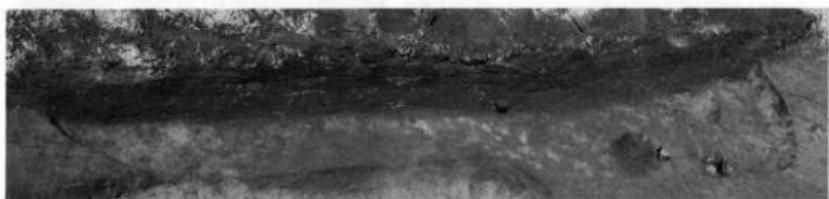
III7号住居址（西から）



III8号住居址（南から）



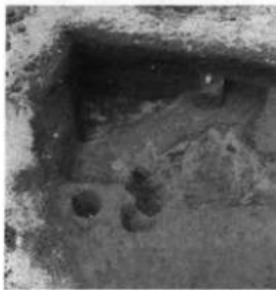
III9号住居址（西から）



III10号住居址（東から）



R22号住居址（南から）



R23号住居址（北から）



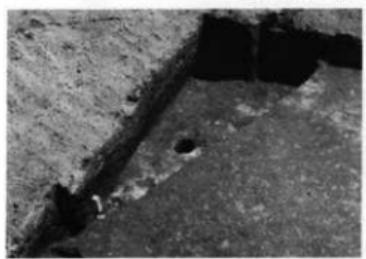
R24号住居址ガ（南から）



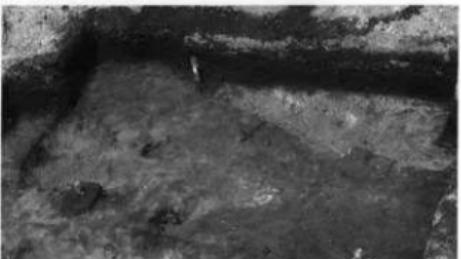
R24号住居址（西から）



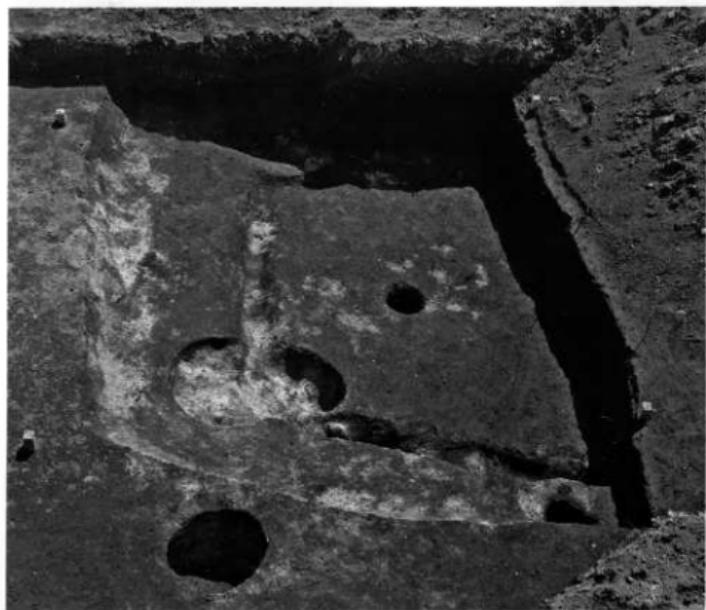
H25号住居址 周囲はH28号住居址（北から）



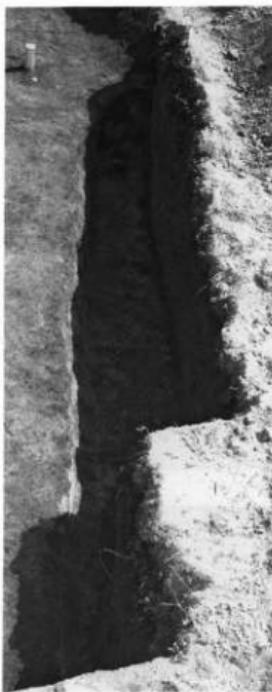
H26号住居址（西から）



H27号住居址 向かって右上はH26号住居址極方（南から）



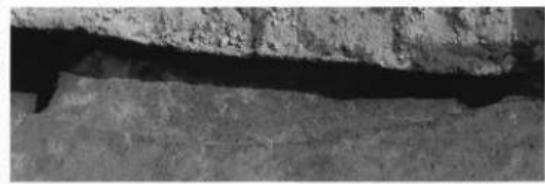
H28号住居址 中央はH25号住居址極方（西から）



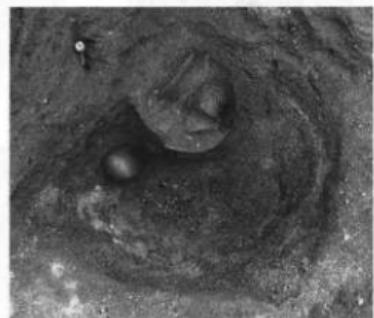
H29 号住居址（北から）



H30 号住居址（西から）



H31 号住居址（北から）

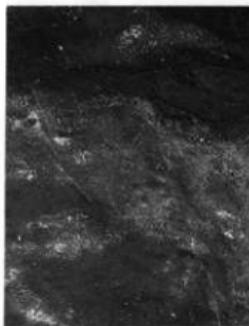


† H32 号住居址遺物出土状況（北から）

— H32 号住居址（南から）



向かって左 H33 号住居址、右 H34 号住居址（東から）



H35 号住居址（西から）



H36 号住居址（北から）



F1 号獨立柱建物址（北から）



F2 号獨立柱建物址（西から）



F4・F5 号柱立柱建物址 (東から)



F3 号柱立柱建物址 (東から)



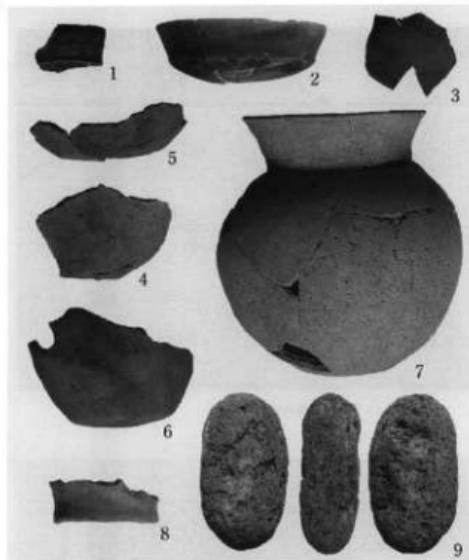
M1 号柱址 (東から)



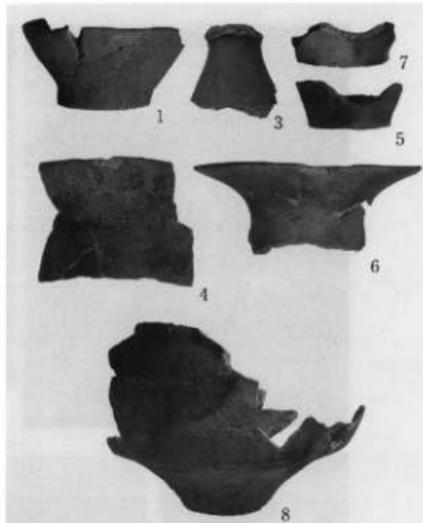
P16 土器埋設状況



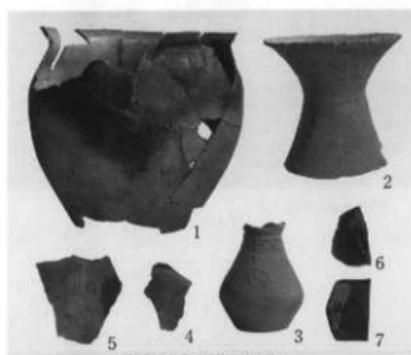
調査区全景 (西から)



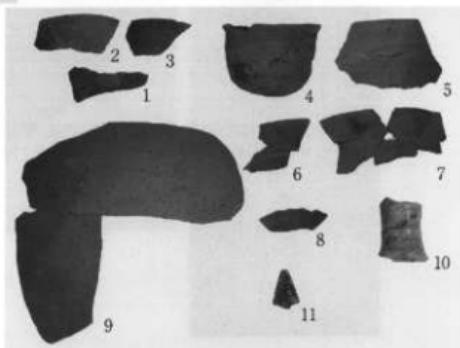
H1号住居址出土遗物



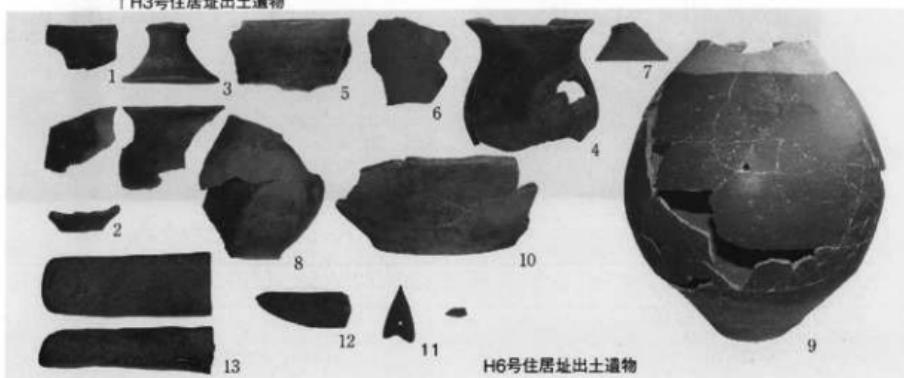
H2号住居址出土遗物



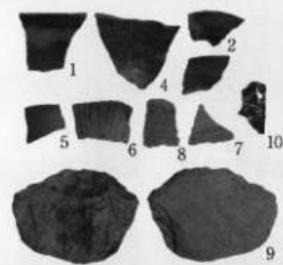
↑ H3号住居址出土遗物



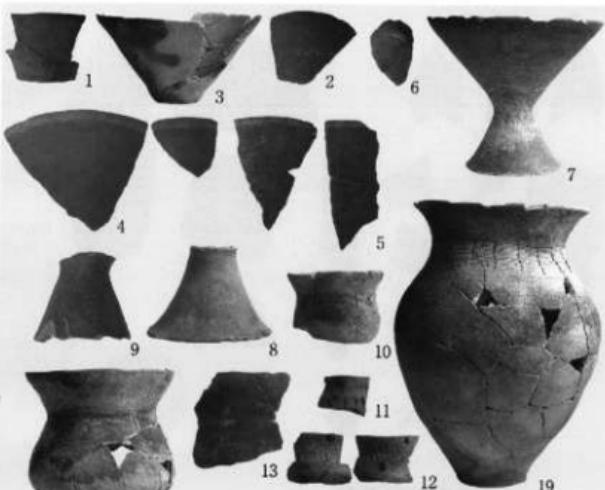
H5号住居址出土遗物



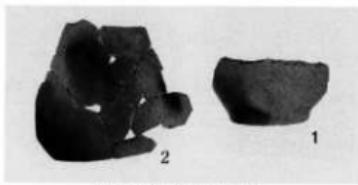
H6号住居址出土遗物



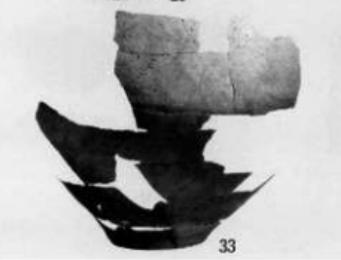
H7号住居址出土遗物

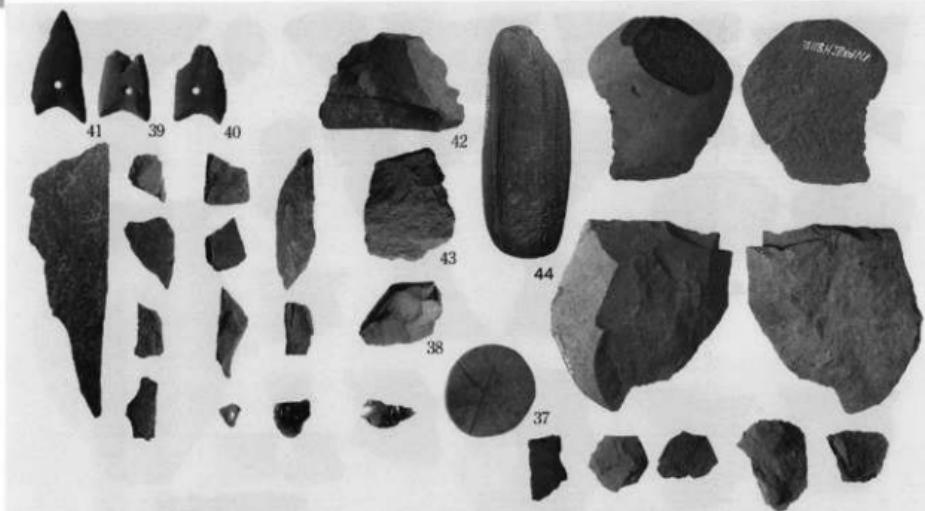


H8号住居址出土遗物(1)



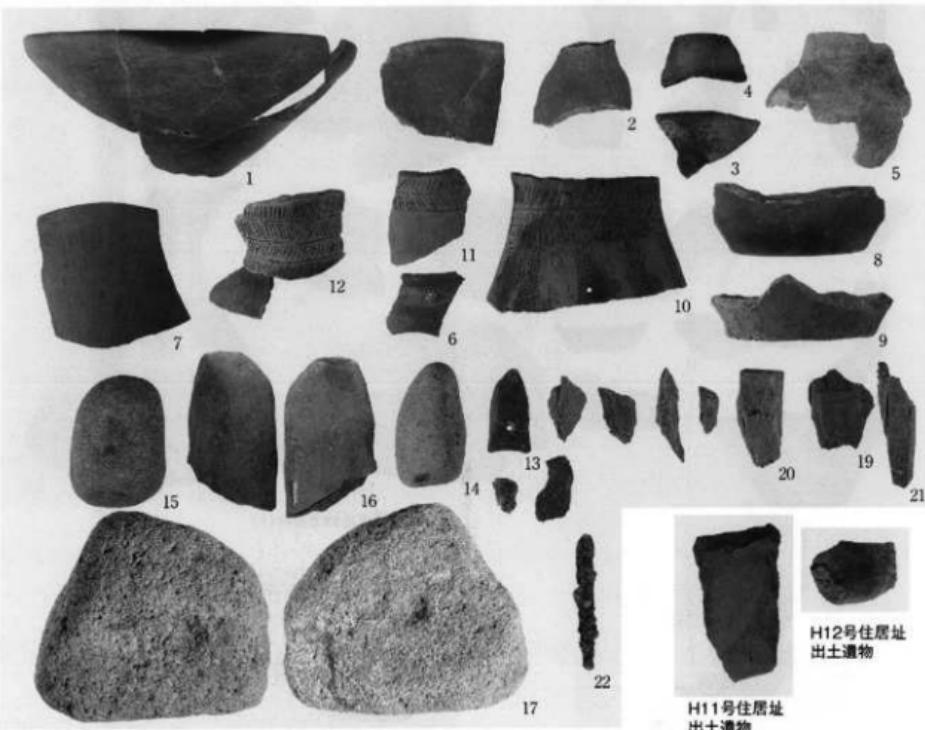
H10号住居址出土遗物

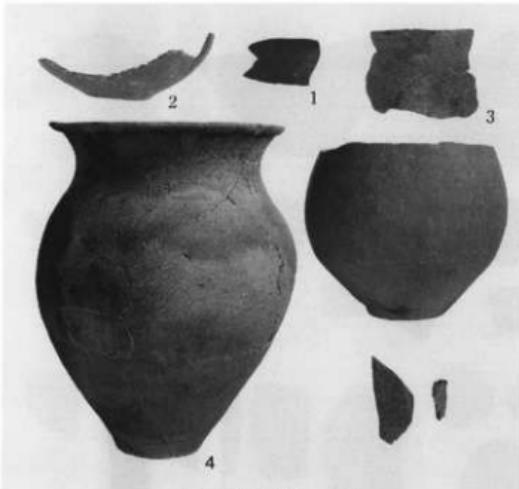




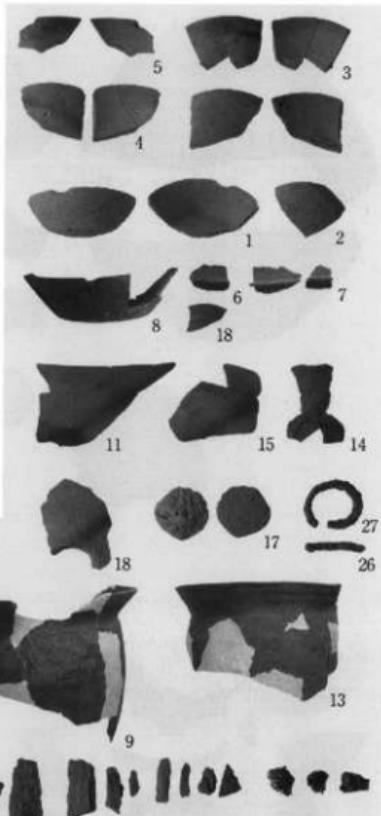
↑ H8号住居址出土遗物(2)

↓ H9号住居址出土遗物

H12号住居址
出土遗物H11号住居址
出土遗物

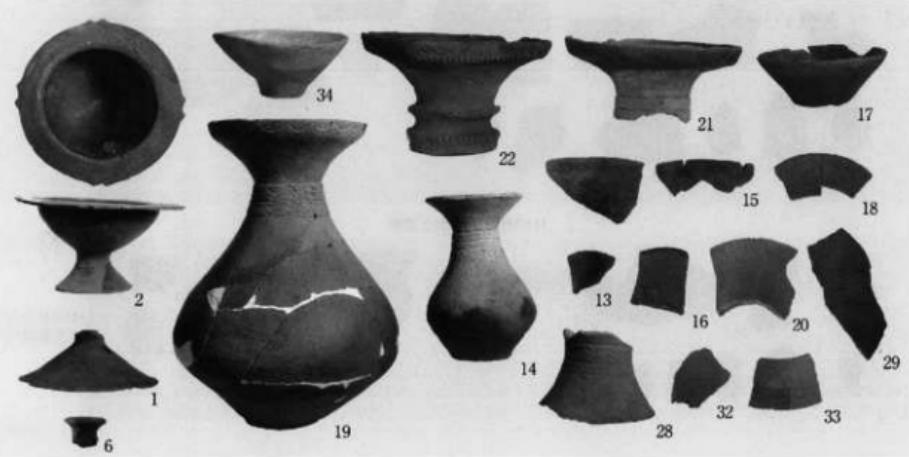


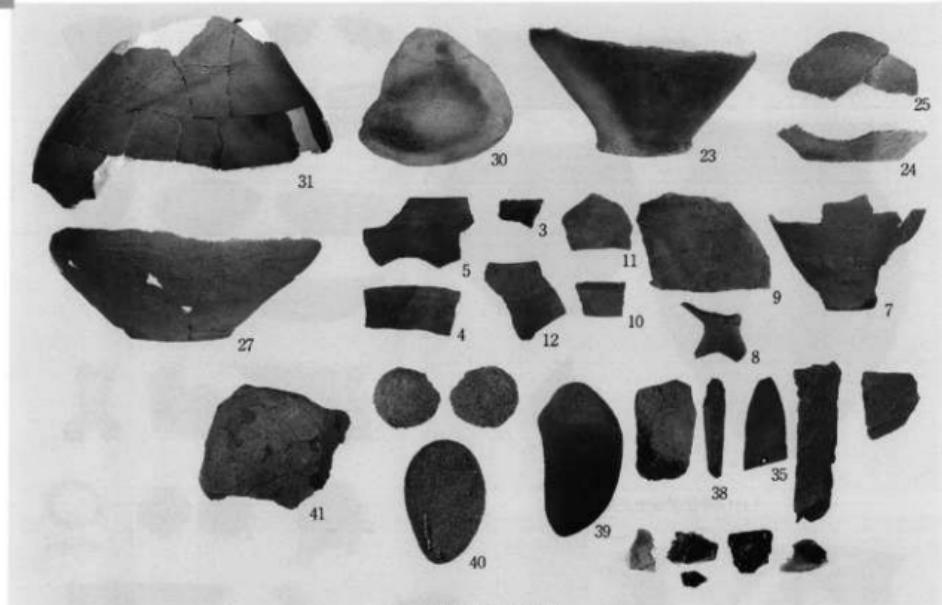
↑H14号住居址出土遗物



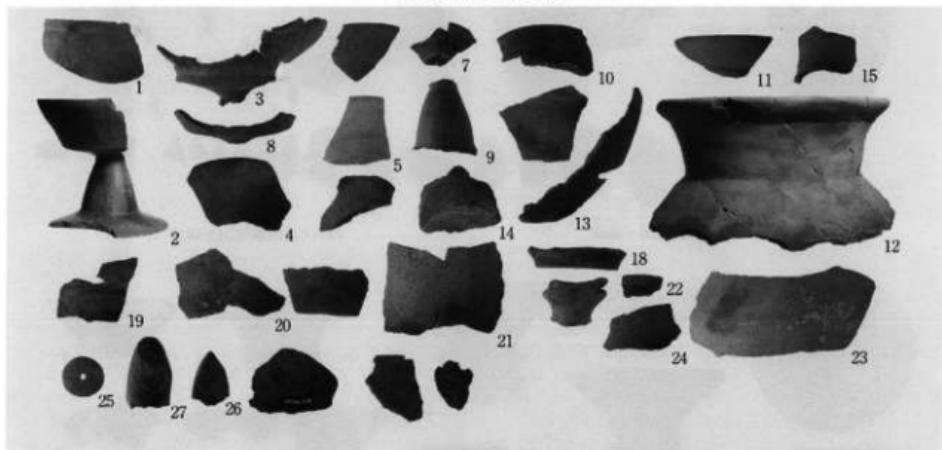
↑H15号住居址出土遗物

↓H16号住居址出土遗物(1)

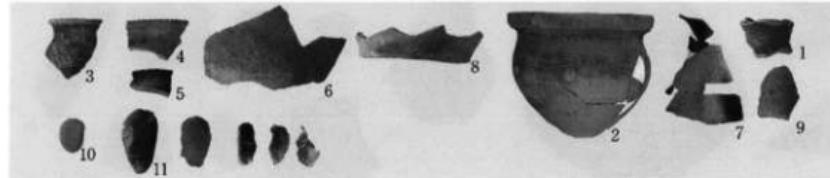


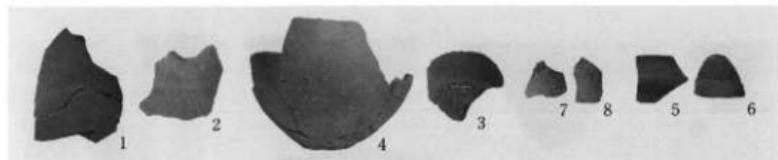


H16号住居址出土遗物(2)

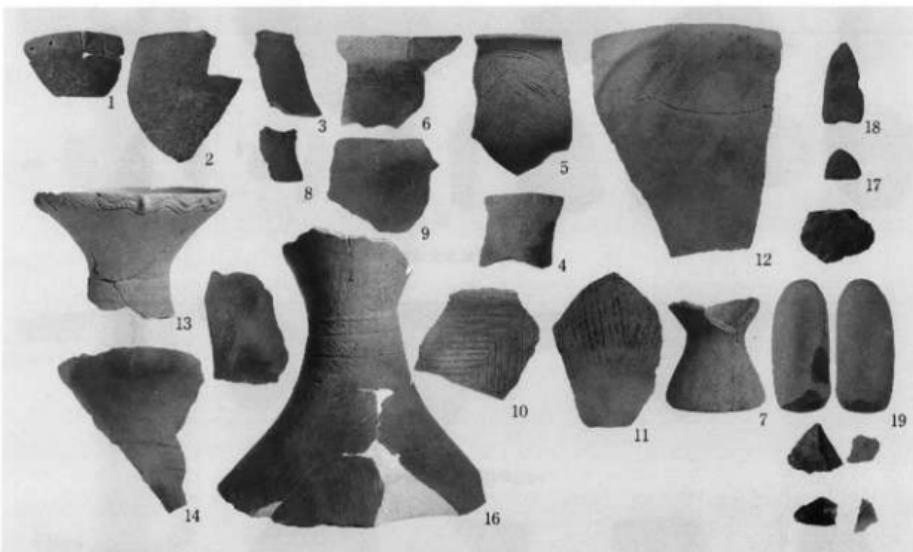


H17号住居址出土遗物

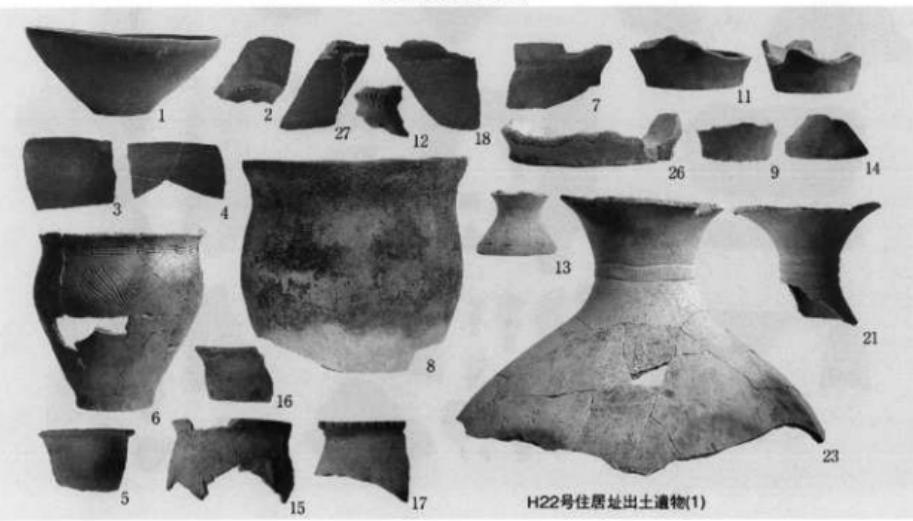
H18号住居址
出土遗物



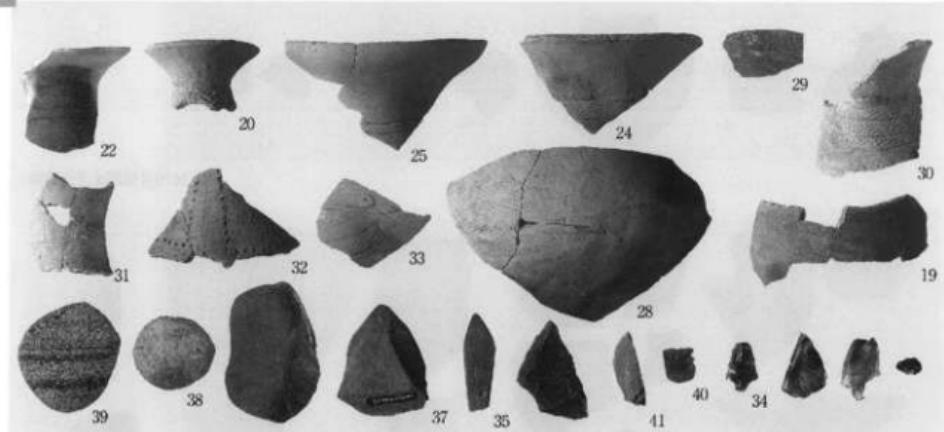
H19号住居址出土遺物



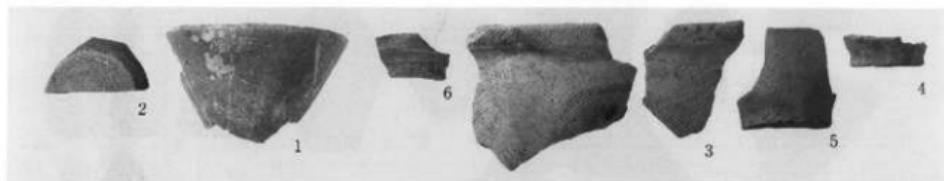
H20号住居址出土遺物



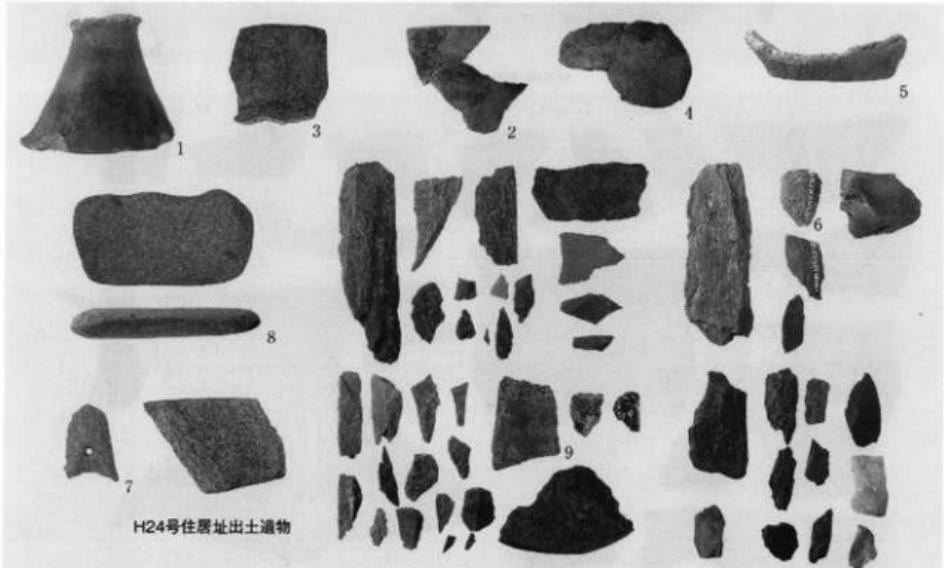
H22号住居址出土遺物(1)



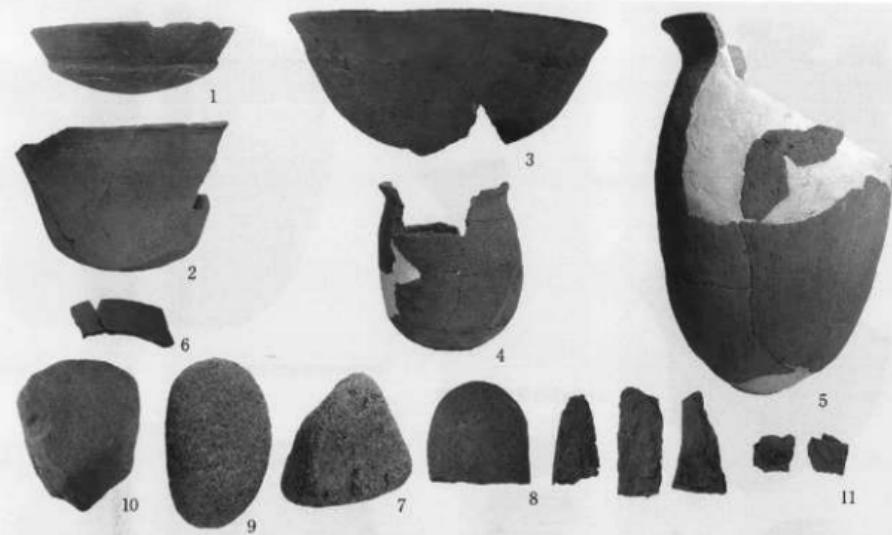
H22号住居址出土遗物(2)



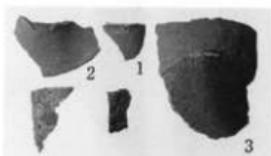
H23号住居址出土遗物



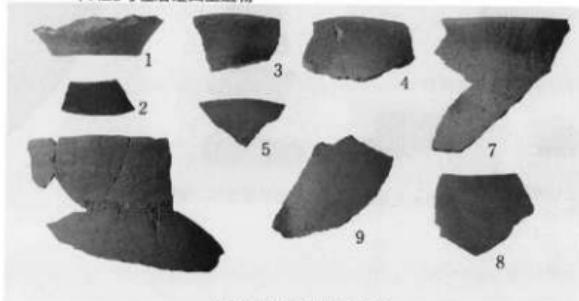
H24号住居址出土遗物



↑ H25号住居址出土遗物



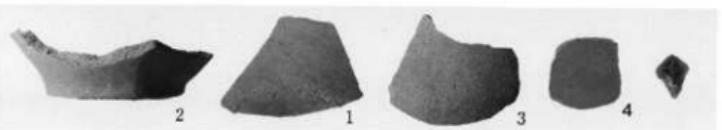
↑ H26号住居址出土遗物



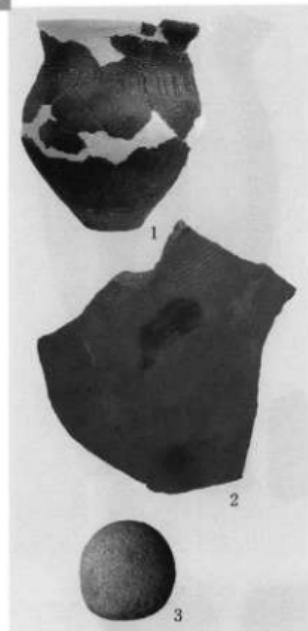
↑ H27号住居址出土遗物



↑ H28号住居址出土遗物



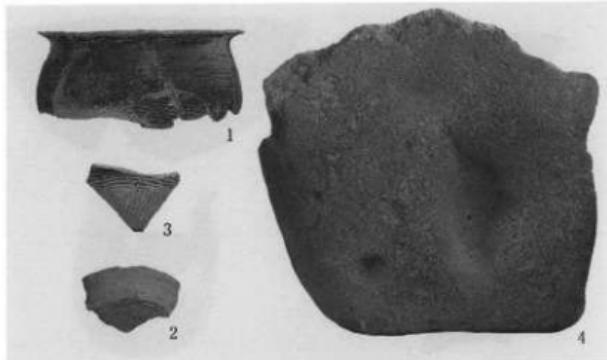
← H29号住居址出土遗物



H32号住居址出土遗物

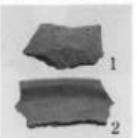
F1号掘立柱建物址
出土遗物

遗构外出土遗物



H33号住居址出土遗物

↓ H34号住居址出土遗物



↑ H36号住居址出土遗物



Pit16出土遗物

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第139集
岩村山遺跡群 西一本柳遺跡Ⅲ

2006年3月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課
〒385-0006 佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321

印 刷 所 白田活版株式会社

報告書抄録

ふりがな 書名	にしいほんやなぎ 西一本梅遺跡Ⅲ
副書名	
卷次	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第139集
編著者名	小林潤寿
編集期間	佐久市教育委員会
発行期間	佐久市教育委員会
発行年月日	20060324
作成期間	113
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな 遺跡名	にしいほんやなぎ 西一本梅遺跡Ⅲ
ふりがな 遺跡所在地	ながのけんさくしいねむらだ 長野県佐久市岩村田
市町村コード	
遺跡番号	52-13
北緯	36、15、47
東経	139、48、13
調査期間	20050405-20060324
調査面積	337
調査原因	展示場建設
種別	集落址
主な時代 遺跡概要	弥生中期／弥生後期／古墳中期／古墳後期／奈良／平安 集落－弥生中期＋弥生後期＋古墳中期＋古墳後期＋奈良＋平安－堅穴住居址＋ 掘立柱建物址＋土坑＋溝＋Pit－弥生土器＋土師器＋須恵器＋石器＋石製品＋ 土製品＋鐵器
特記事項	当地方では資料が少ない、弥生後期前半資料が蓄積された。